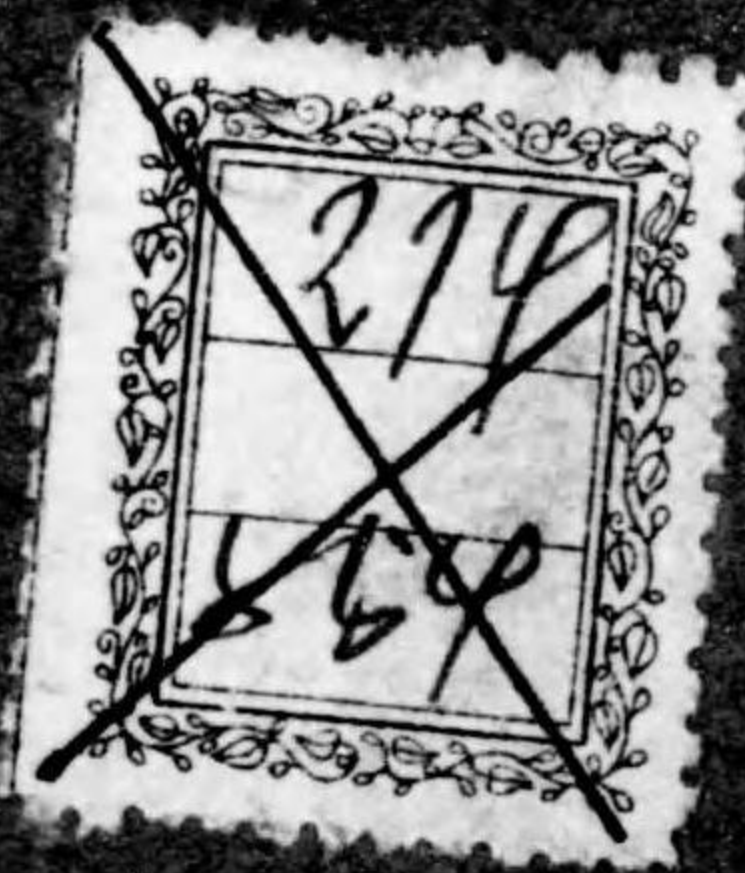


書叢ギカア

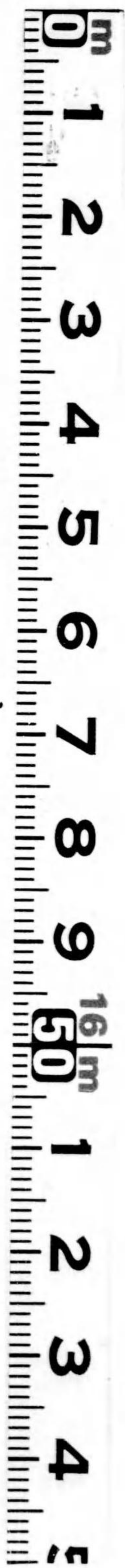
生一の女

作ンサツパウモ



特

3

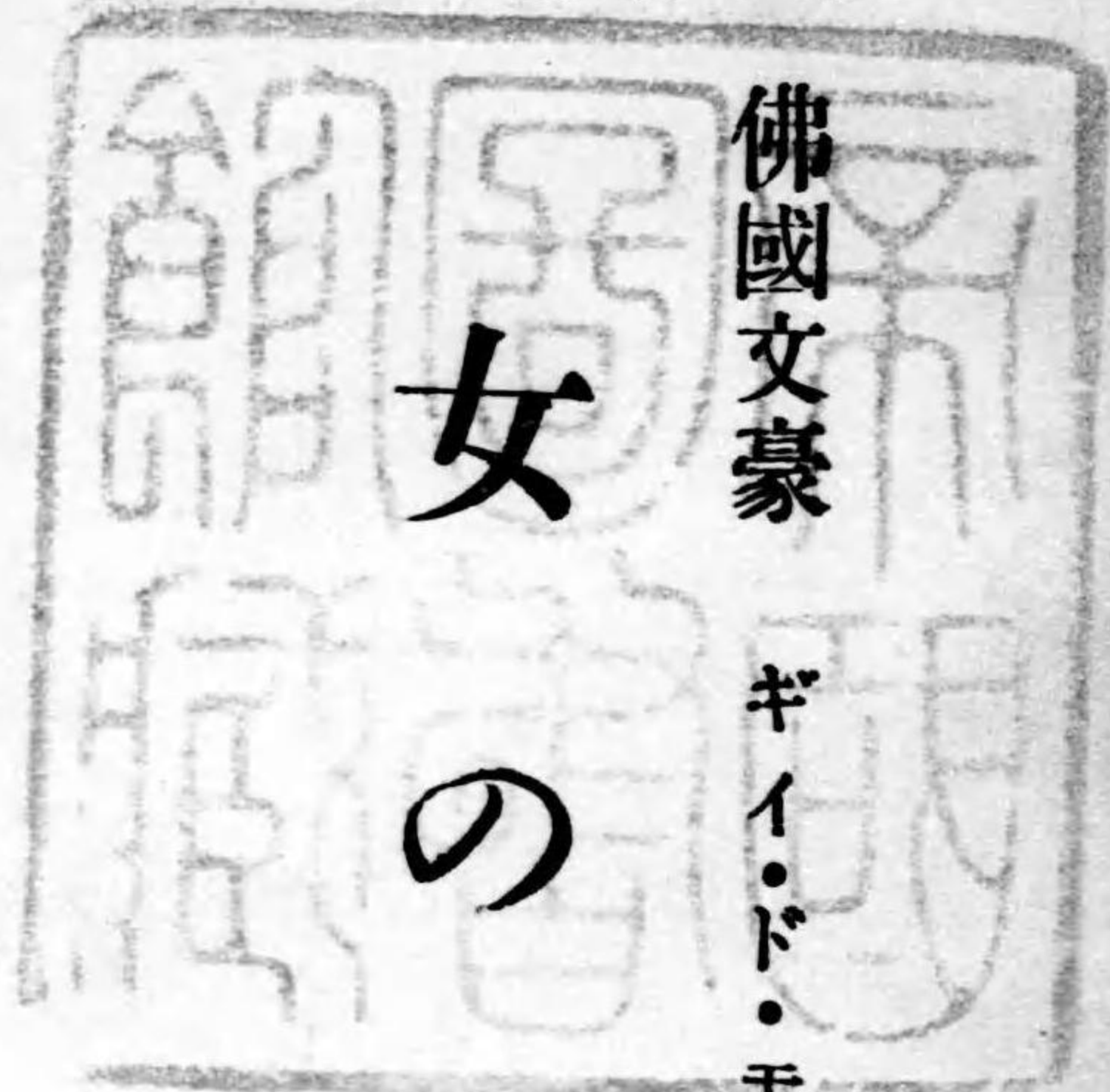


始



持100
390

編七十第書叢ギカア



佛國文豪

ギイ・ド・モウパッサン作

女

の

一

生



大正
3. 5. 23
内交



原 著 者 莫 帕 薩 ン

アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや、懊惱之を久うして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轅を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜を經たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せしめ度し』との信念に至りては、年を經て益々固きを覺ゆ。是予が非才自ら顧みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝文にして、誠に珍重すべき内容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尠大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行するに至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各冊を全部金十錢にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に翻譯す。如何に尠大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。依つて以て従來専門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫の、高價、尠大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんとす。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

(2)

大正三年三月

赤城正藏白

解題

近來は、わが邦でも外國文學の研究が盛んになり、種々の作家のものも讀まれるやうに成つたが、併しその初め、トウルゲネエフとモウパッサンが讀まれた程には、廣くそして多くはないやうである。其中でもモウパッサンの『女の一生』(Une Vie)は『美觀の友』(Bel Ami)と共に、新しい文學を讀む者の入門書のやうにも思はれてゐた。

(1)

ギイ・ド・モウパッサンは、一千八百五十年八月五日、佛蘭西のセイヌ・アンフリール縣、ミロムスニユの領主館に於て呱呱の聲をあげた。彼れは彼の同國自然派の開祖である、ギヌスタア・フロオベエルの弟子で、長い間その忍耐強い薰陶の下に勞作してゐた。或る時、『脂肪の塊團』(Boule de suif)と題する一娼婦を主人公とした短篇を描いて、師のフロオベエルに示した。師はこれを見て、『若しこのやうな作を一ダアスも書いたら、お前は不朽の作家にならう。』と

言つた。

その後、一千八百九十一年頃には、多くの勞作の爲めに激烈なる神經衰弱に罹り、遂には發狂して、翌年には、自殺さへも企てた事があつたが、後間もなく癪狂院に於て、悲惨なる短銃自殺を遂げた。時に一千八百九十三年七月六日であつた。

『女の一生』はモウパッサンの長篇小説中でも、代表作として第一に指を折られたものである。一體、モウパッサンは何方かと言へば、短篇に於いて優れて居るので、その数は約二百もある。そして其の長篇小説は、短篇の連続といふ感がないでもない。現にこの中にも、二三の短篇が含まれてゐる。その點からいふと、本書はモウパッサンを知る便として、最も適當なものであらうと思ふ。この篇に依つて、讀者はモウパッサンの簡素と、鋭敏と、幻滅的精神との一端を窺はれたならば、編者の幸これに過ぎぬ。

大正三年四月十五日

編 者 識

女の一生

ギイ・ド・モウパッサン原作
村上 静 人 編

發端

シモン、ジャック・ル・プルトイ・デ・ヴォオ男爵は、偏人でお人好しな舊弊紳士だつた。熱心なるルウソオの崇拜家なので、野や森や動物や、凡べての自然を愛する優しい感情を有つてゐた。生れが貴族だから、千七百九十三年の大革命的な年を本能的に嫌つたが、哲學的素地と自由教育を受けたお庇で、毒にもならない虚飾の念から、專制政治を好かなかつた。男爵の性格の美點で、同時に缺點とも見られるのは寛容で、愛したり恵むだけ抱擁したりするには十分でない寛容、系統も立てずに物を創る人の寛容、男爵は意志の一部が麻痺れてゐるやうに、自分に起つて來る衝動を抑壓けようとも爲ないで、寛容の爲るが儘に

任せてゐた。これは氣力が無い爲めて、かうなると最早一個の惡習に償ひする。理論で事を處する男爵は、令嬢を幸福で善良で、素直で慈愛の深い婦人にしようとして望んで、其教育の全計畫を案出した。先づ令嬢が十二歳になるまでは家庭に置かれたが、それから母親が泣いて訴へたにも拘はらず、聖心院といふ尼寺へやられた。現世の事柄から引き離して、父親は令嬢を厳しく其處に禁錮めて置いた。と言ふのは、十七歳になつて家へ歸つて來る時、正しい詩歌の沐浴に漬かる事の出來るやうな、無垢な處女でゐて貰ひたいからだ。そして豊饒な土地に取り圍まれた田舎で、令嬢を教育して、清淨な人生の法則や、動物の無邪氣な愛情や、素樸な優情を觀察させて、訓へ導きたいからである。

令嬢のジャンヌは、定め年の年齢に達するまで、惑はしになるやうな快樂は父親から禁じられて居たので、聖心院へ入つてからと云ふものは、其處のルウアの土地を離れた事がなかつた。只二度だけ、巴里に二週間ばかり居た事があつたが、其處も同じ都會なので、ジャンヌは田舎へ行つて見たいと思つてゐた。

今、令嬢は幸福で一杯になつて、嬉々として、晝間退屈の時や長い夜の間に、幾度か描いて見た夫々の喜悅や、あらゆる楽しみな冒險に臨みながら、今、修道院を去らうとして居るのだ。

一

ジャンヌは荷造りを終へると、窓際へ行つて見たが、雨は未だ歇まなかつた。昨夜終夜、強雨は家根や窓硝子に音を立てゝゐた。低く垂れた陰氣な雲が破れて、雨は髓まで洗ひ出して、この世界を捧砂糖のやうに溶かして了はうと、有りたけの量を注ぎ下すやうに見えた。熱い風は囁々と吹き荒んで、雨水の溢れる樋の鳴る聲は、空虚な街々に満ちた。家といふ家は、海綿のやうに内部まで濕み通る濕氣を吸つて、家根部屋から穴藏まで壁が濡れた。

前の日に修道院を出て、辛と自由な身點になつて、長い事夢みてゐた人生の凡べての幸福に臨んでゐるジャンヌは、天候が快くならなければ、父親が出發

を遅らせは爲まいかと、朝からもう百遍も氣にして見た。

『ジャンネットや。』

と戸の外で呼ぶ聲がした。

『お父様、お入り遊ばせ。』

ジャンヌが返事をしたので、父親が入つて来た。ジャンヌは駈け寄つて、父親の頸の周圍に腕を掛けて接吻した。

『ねえ、今日出發するんでせう。』

と訊いた。父親は微笑みながら、少し長めに刈つてゐる白い頭髮をうしろ様に振つて、窓の方を指した。

『こんな天候に旅へ立たうなんて、どうして。』

『ねえ、お父様、後生ですからお出發けになりませんか。午後にはきつと晴れてよ。』

令嬢は甘へるやうに、優しく言ひ解かうとした。

『けれども、お母様が承知をしまい。』
 『それなら、妾が請合ひますわ。妾、お母様にさう申し上げても好くつて。』
 『うん好しく。もしお母様がお前に説き付けられたら、私は何時でも立つとしようよ。』

令嬢はこの日の来るのを千秋の思ひで待ち焦れてゐたのだから、即刻、男爵夫人の部屋へ行つた。聖心院にゐた時から、長い事田舎へ行つて見度いと望んでゐたところが、今、領地のレ・ピュールへ行つて、イイポオル近くの岸の上に建つてゐる古い城館で、夏を送らうと言ふのである。令嬢はこの海濱の自由な生活の際限もない幸福を待ち焦れてゐた。そして其の別荘を譲られて、其處で結婚して、それからズット其處で暮すと言ふことも判つてゐた。晩から掛けて間斷なく降る雨が、ジャンヌの生活に取つて、最初に來たほんたうの悲哀だつた。

三分經つと、母親の部屋から、大きな聲で呼ばはりながら駈け出して來た。

『お父様、お父様、お母様は御承知になりました。馬の仕度をするやうに被命つて下さいまし。』

事實、雨は未だ少しも歇まなかつた許りでなく、支度が出来て馬車が扉口に着いた時には、一層雨脚が早くなつた。ジャンヌが馬車へ飛び乗る許りのところへ、夫人が、一方は良人に、一方は壯漢のやうに屈強と好い體格をした脊の高い小間使に扶けられて、階段を降りて来た。小間使と言ふのはカウから来たノルマンデイの娘で、どう見たところで二十歳と思はれるが、實は漸く十八になつた許りである。令嬢のジャンヌとは乳姉妹なので、男爵家では令嬢の次に置いてゐた。名をロザリイと言つて、この娘の重な仕事はと言へば、この四五年愚痴の種子になつてゐる心臓肥太症に罹つて、ぶく／＼肥満つた夫人の散歩に出る時、介添として歩く事である。

夫人は呼吸苦しさに、扉口まで来て、雨水のざあ／＼流れ落ちる中庭を見て、

『随分亂暴な話ですね。』
と呟いた。

『だつて、貴女が言ひ出したのではないか。』

良人は微笑みながら答へた。

夫人は、辛とこさで馬車へ乗つた。馬車の彈機はその重みで皆曲つて了つた。男爵は夫人の傍に座を占め、ジャンヌとロザリイは馬を脊にして席についた。料理女のリュデイヴィイヌもシモン親爺の傍へ攀ぢ登つて、大きな粗い羅紗に身を包んだ。馭者のシモン親爺は雨の下に頭を屈め、背を丸くしてゐる。肩覆の付いた外套の外、何處も見えない。呻くやうな風が窓を揺ぶつて、雨を道路に吹き付けた。馬は埠頭の方へトットと駈けた。帆柱や帆桁や綱が裸木のやうに灰色の空に突出つてゐる大船の列んでゐる側を過ぎて、長い廣小路に入った。直に田舎へ来た。屍のやうな生氣のない枝を垂れてゐる枝垂柳の輪劃が、折々雨の飛沫の中に薄すり見えた。馬の蹄鐵は憂々と鳴響いて、四箇の車輪は泥の

輪となつた。

馬車の中の人々は、皆黙つてゐた。その人々の心は、地面のやうに濕つてゐるやうに思はれた。夫人は後へ凭り掛つて眼を閉ぢ、男爵は單調な濡れた野を悲しきやうに眺め、膝に包みを載せてゐるロザリイは、思ひに沈んでゐた。只ジャンヌだけが暗所へ投げ込まれてゐた後で、外氣に曝された植物のやうに、この温い雨の下で甦つたやうな氣がした。荒廢した田舎の景色も、迅速に駛つて行く樂しさと、洪水のまん中に護られてゐる嬉しさを、一層強く感じさせる許りだつた。降りしきる雨の下で、二疋の馬の脊からは、湯氣の雲が立ち騰つた。

夫人は漸次に睡眠に落ちた。男爵は夫人の方へ身を寄せて、丸い膝の上に重ねてゐる手に革の手帳を掴ませた。此の感觸が夫人を覺した。夫人は急に睡眠から覺された人のする、茫然とした面容で、膝に載せられた物を見た。手帳は落ちながら二つに開いて、挟んであつた手形や金貨が馬車の中に撒き散らされた。それで夫人は悉皆眼が覺めた。令嬢の浮いた心持は、出口を見付けて笑ひ出し

た。男爵は落ち散つた金を拾ひ上げて、妻の膝に載せた。
『エルトオの地面の代だよ。レ・ビニールに落着く意だから、修繕費に充てるので、彼地を賣つたのさ。』

夫人は六千四百圓と數へて、靜かに衣囊へ收れた。先祖から遺された三十一箇所の土地の中で、これは九番目に賣つた地面である。この人々の寛容が財産を減らして行くのだ。黄金は溶けて消えて失つた。一體どんな風に費はれるのか。それを知つてゐる者はなかつた。『何だか知らないが、今日百圓費つた。何に費つたか、是れと言つて残つた物もないのに。』と、いつもこんな事を言つてゐた。恵むといふ一事がこの人達の生存上、大きな喜悅の一つだつた。この點に關しては、誇張した仕方でお互ひに十分理解し合つてゐた。

嵐が漸々靜まつて、やがて霧のやうな大層美しい微雨だけになつた。雲の弓狀が高く軽くなるやうに見えた。不意に長い日の斜光が野に落ちた。雲の裂目から蒼空が一條見えたが、裂目は而帕が除去られるやうに大きくなつて、深碧

に澄んだ美しい空が世界の上に擴がった。地面から出る幸福に吐息のやうな新しい微風が吹いて来て、畑や森からは翅を乾かす小鳥の楽しさうな歌聲が聴えた。

夕が近づいた。ジャンヌの外の人達は皆眠つた。馬を休ませて飼料をやるので、馬車は二度も止まつた。太陽は沈んで、遠くの方で鐘が鳴つてゐた。小村の燈がポツ／＼點されて、空は星の光に飾られた。時としては邸宅の燈の、暗を擘く火光も見えた。と、丘の背後、樅の木立の中に、赤い大きな、眠さうな月が昇つた。

窓を悉皆明けて了つた程穩かだつた。ジャンヌは空想に疲れて、幸福な夢を描き盡して、眠り初めた。餘り長く一箇所に居るので、時折身體が痺れて眼を覺した。窓外を見ると清い夜の裡を飛ぶやうに過ぎて行く木々や、野に臥てる牝牛が、馬車の響に首を擡げるのが見えた。ジャンヌは新規に居住ひを直して、途切れた夢を見繼げようとしたが、間斷なしに搖れる馬車の響が耳につい

て、考へを掻き亂した。心も身體のやうに疲れを感じて、再び眼を閉つた。到頭、馬車が止つて、扉口からは燈火を持つて人が出て來た。ジャンヌが起きた時には、百姓の燈火に足許を照らさせながら、男爵とロザリイとで夫人を家へ連れて行く所だつた。夫人はグツタリ疲れ切つて、呼吸苦しさに『子供達や、どうしようよ。』と言ひ續けた。そして何も飲みも喰べもせず寝床へ行つた。

ジャンヌと男爵は二人で食事をした。親子は眼を見合せる度毎に莞爾した。食卓の上では始終手を握つてゐた。二人共子供のやうに悦んで修覆の濟んだ別荘を見廻つた。別荘は灰色に變る白石で造られてゐた。中は一聯隊位宿められる廣さで、周圍は城館と共に地面の付いてゐる、大きな、高いノオルマンデイイの家の一つだ。

ジャンヌは蠟燭を消す前に、再び部屋を見廻して、名残り惜しさうに床へ入つた。左側の窓から月光が流込んで。床上に光の溜水を造つたり、壁の上に蒼白い影を投げたりした。裾の方の窓からは軟かい光を浴びた大きな木が見えた。

ジャンヌは寢返りをして眼を閉つて見たが、直ぐ又眼を開いた。未だ馬車に揺られて居るやうで、耳に響が残つて居たからである。直ぐ睡らうとして横になつてゐたが、やがて心の苛々するものが身體にも傳はつて、跳ね起きた。長い肌着を着て、手も足も露出した儘、光の洪水を渡つて、窓を開いて戸外を眺めた。凡べての物が日光で見るやうに明らかに見える位、夜は澄んで清らかだつた。令嬢は田舎全體を見た。初めは唯呼吸をする事の快さに身を任せてゐたが、やがて田舎の静けさが水浴のやうにその心を鎮めた。ジャンヌは次第に胸の膨れるのを覺えた。清らかな夜のやうな囁きや、戦く命が自分を取り圍んでゐる此の夜の虫のやうな無数の欲望で、一杯になるやうだ。自分にも判らない同情の念がこの活きた詩の方へ自分を率きつけた。喜悦と幸福とが、この穩かな白い夜の中を、自分の方へ漂つて來るのを感じた。そして戀を夢み初めた。

戀！ この二年間それの來る日を待ち焦れてゐたが、到頭自由に戀の出來る時が來た。この上はたゞあの人に會へば可いのだ。あの人はどんな人だらう。

判らない。又そんな事を考へて自分を惱ませようとは爲なかつた。あの人はあの人に相違ない。それで十分だ。自分は誠心をもつてあの人を尊敬する、あの人も力一杯自分を愛して下さる。と言ふ事だけ知つてゐた。それからこのやうな夜、星の輝く下をあの人と一緒に散歩する自分の姿を描いて見た。ふと、彼處に、自分の近くにあの人が居るやうに想はれた。朧氣な感情が頭の頂邊から足の爪先までツーツと通り過ぎた。ジャンヌは自分の夢を掴まへようとするやうに、思はず兩手で胸を掻き抱いた。そして自分を弱らせるこの未知の戀人の方へ口を突きだした時、海の春風が令嬢に戀の接吻を送つたやうに、何ものかがその上を通つた。突然、城館の背後の道路を、誰れかこの夜更けに歩いてゐるのが聞えた。戀に満たされた魂は夢中になつて、有り得可からざる事を信じ、運命の小説的な引き合せを信ずる喜びで『あ、あの人がぢやないかしら。』と思ひながら、その足音に聞き入つてゐたが、その人は通り過ぎて了つたので、ジャンヌはまるで瞞されたやうに悲しんだ。けれども直に自分の望み、狂氣染みた

興奮に気がついて、自分の愚かしさに微笑んだ。少し気が落着いて来ると、もう少し少筋の立つた夢想を初めた。その人と一緒に海に見える静かな處の家で暮らすと、子供が二人生れる。男の子はあの人の、女の子は自分の。そして子供が草原を駆け廻つてゐるのを、両親は誇りかな眼で見守りながら、時々、子供の頭上で愛に充ちた眼を見交はす、と言ふ景色を描いて見た。

空の旅路を終つて、月が海の上へ傾き掛けた頃までも、ジャンヌはちつと夢みてゐた。空気が冷たくなつて、東の方の水平線が漸次明るくなつた。右側の島地で鶏が鳴き出すと、左側からもそれに應じて何羽も鳴き立てたが、鶏舎の壁越しに聞えるこの暖れた調は、遠くの方から聞えるやうに思はれた。星は漸次に白んで行く空の圓蓋から消え去つた。ちゝと鳴く小鳥の聲も聞えた。初めは樹の葉の中から悸々鳴くのが聞えて居たが、やがて大膽になつて、慄へを帯びた悦ばしい聲となり、枝から枝へ、木から木へ擴がつて行つた。ジャンヌは不意に燦々する光を仰いだ。両手に埋めてゐた頭を上ると、曙の輝きに眩暈が

して、眼を閉つた。

半分白揚の列木に隠れてゐる眞紅の東雲の峰は、眼を覺した地球に赤い光を投げかけた。そして輝く雲を突き破りながら、激しい光で木や原や太平洋や、水平線を浸しながら、燃えるやうな太陽が現はれた。ジャンヌは氣の狂ふやうな幸福を感じた。輝かしい自然の前なる有頂天の悦び、限りなき優しさが心を満した。自分の日の出、自分の曙光、命の初め、望みの現はれである。目を掻き抱きたいといふ望みを有つて、輝いてゐる空の方へ両手を擴げた。ジャンヌは何かこの日出のやうな神聖な事を言ひたかつた、叫びたかつた。けれども、無氣力の恍惚の裡に、黙つてゐた。それから前額を両手に押し當て、眼に涙を湛へ、嬉しさが込み上げて来るので泣き出した。頭を擡げた時には、夜明の輝きは全く消えてゐた。ジャンヌは落着いて来ると、少し疲勞と寒氣を感じた。で窓は明け放した儘、寢床へ身體を投げ出して、一寸の間思ひ沈んでゐたが、八時に父親が来て、名を呼んだのも知らずに、そして父親が部屋へ入つて来た時、

漸ら眼が覺めたほど、グッスリと眠て了つた。

二

ジャンヌは愉快な自由な生活を送つた。父親の男爵は農業上の改良を企て、いろいろ實驗を試みたり、イイポオルの船頭と海へ出たりしてゐた。そして食事の度毎に、男爵はいつも其話を持ち出した。夫人は又並木は日當りが悪いから、クイヤアルの隣地の白揚の並木路を幾度も往つたり來たりした事を話した。夫人は運動をするやうに勤められて居るので、毎日數時間宛散歩した。ロザリイの腕を借りて長つたらしい趣味のない散歩をしては、又引き返して來るのだつた。夫人は『妾の肥大症』を話すやうな調子で、この散歩を『妾の運動』と呼んでゐた。

十年許り前に、胸の動機が酷いので、醫者に診て貰つたら、醫者が心臟肥大症だと言つた。それから以後、夫人は譯判らずにこの言語を使つた。そしてこ

の病氣が宛然自分獨得の病氣であるかのやうに『妾の肥大症』の話をした。男爵も令嬢も夫人の衣服や洋傘の事を話すのと同じやうに『妾の肥大症』とか、『お母様の肥大症』とか言つてゐた。ジャンヌは時折ロザリイの代理を勤めて、母親の散歩に伴をして、夫人の幼い時の昔噺を聞く事もあつた。令嬢はさういふ話の中にも自分を見付けた。母親の思想や希望が、今の吾が身の思想や希望と同じなのに驚いた。夫人の呼吸が詰りさうになるので、時々、數秒途切れては、又その歩行のやうにそろ／＼と昔噺が話される。ジャンヌは母親の物語の終ひにならぬ先に、自分の幸福な未來の事を想つてゐた。

ある日の午後、二人が遊歩場の端れの腰掛に休んで居ると、並木路の向ふから、肥つた坊様が歩いて來るのが見えた。坊様は會釋をして笑顔を作つて、三尺許り離れた所へ來ると、また會釋した。

『奥様、御機嫌宜しう。』

これは此の教會區の牧師である。莫迦に肥つた赤ら顔の、汗つかきの男だ。

男爵も來合せて、この牧師を食事まで引き止めた。牧師は食後のお菓子の出る時には、氣の置けない調子で面白い話をした。ふと何か好い事を思ひ出したやうに、

『貴方がたに御紹介いたさなければならぬ教區民が新規に出來ました。ラマアル子爵と言ふお方です。』

と言ひかけると、貴族社會の事なら何でも詳しい夫人が、

『そのお方は、ラマアル・ド・リュウル家の方ではありませんか。』
と訊いた。坊様は頷いて、

『左様、先年歿されたジャン・ド・ラマアル子爵の御子息です。』

貴族好きな夫人は、いろ／＼其の人の事を訊いた。牧師は子爵が氣の利いた經濟的な性質の人だと話した。

『お立派なお若い方でございます。確乎した、物靜な方ですが、田舎に被居つては面白い事もございますまい。』

と附加へた。

『宅へお連れなさい。此處へ來られるやうになるかも知れないから。』

男爵がかう言つた。そして話題が變つた。

次の日曜日に夫人とジャンヌが教會へ行つた。そして歸途に次の木曜日にお祭へ聘ばうと思つて牧師を待つてゐると、脊の高い立派な青年と連れ立つて出て來た。二人の貴婦人を見るより、喜悅の色を現はして、

『お、丁度好い所で。え、男爵夫人にお嬢様。貴女方の御隣人、ラマアル子爵を御紹介致します。』

と叫んだ。子爵はお辭儀をして、長い間貴婦人達の近付になり度いと思つてゐた事を述べた後で、上流の社會に馴れた、氣輕い調子で饒舌出した。女には大騒ぎやられるけれども、男には誰れにだつて好かれないと言ふやうな顔立だつた。眞黒な縮れ髪、長い眉、黒い眼は深味と優しさを有つてゐた。濃く長い睫毛は眼付に物を言はせて、貴婦人の胸を際せたり、籠を持つてゐる貧乏人の

娘を振り返らせたりする、白眼の少し着みがかつてゐる眼の恍惚とした魅力が、子爵の詰らない言葉にも何か深い意味のあるやうに思はせたり、その思想を深いものであると言ふ風に信じさせたりした。

それから二日経つて、子爵は最初の訪問をした。子爵と夫人とは、いろいろ貴族仲間の知人の話をした。貴族仲間の結婚は、社會の大事件と同じやうな重大な事に思はれた。で未見の男女の事を、知己のやうな風で話した。此處にゐる人達の事も、遠くに住つてゐる人々は、同じやうな調子で話をするのである。かうして自分達の階級といふ事、同じ貴族であるといふ事だけで、この仲間は誰れでも彼れでもお互ひに知己であるやうに、朋友親類であるやうに想ふのである。只其の意見が同族の人々の信仰や僻見と違つてゐるので、少々非社交的な男爵は、近くにゐる貴族の事を一寸も知らないので、子爵に訊ねると、

『この附近には、上流の人々が極く少いのです。』

とラマアルは、まるで近所の小山に兎が居ないと言ふやうな調子で答へて、

其の人達の事を詳しく話して聽かせた。

子爵は歸らうとして立ち上つた時、特に貴女だけに挨拶するのですと言つたやうに、ジャンヌに最後の眼を向けた。夫人は子爵を好く出来た人と思ひ、男爵は非常に教育のある人だと言つた。翌日、子爵は馳走に招かれたが、それから後は毎日規則正しく訪問するやうになつた。

或日、早朝から男爵父子と子爵は、ラスチック老爺といふ船頭を雇つて、エトルタへ向けて船を出した。男爵は船尾に陣取つて帆を操つてゐた。ジャンヌと子爵は列んで席を取つたが、二人とも少し興奮してゐた。男が立派で女が美しい時には、若い二人の仲に直ぐ起る、明瞭でない微かな戀慕の情が萌してゐるのだ。秘密の默契が同時に二人の眼を見合はさせるので、始終視線が會つてゐた。惟ふに、二人はお互ひに相手の事を考へてゐた故であらう、かうやつて傍近く坐つて居るのが、二人には幸福だつた。

岸に着いた時、男爵は船を綱でシツカリ陸地に縛つてゐる間に、ジャンヌが、

船から上るのに、足を水に濡らさないようにと、子爵は令嬢の身體を掴まへた。この短い抱擁に二人は興奮して、小石の多い急な濱を登つて行つた。

『全く似合ひの御夫婦様でございますなあ。』

ラスチック老爺が、男爵にこんな事を言つてゐるのが、二人に聞えた。

一行は濱邊の小さい旅屋で食事を取つた。海の上では一同黙つてゐたが、食卓に向ふと、學校を放れた子供のやうに喋り立てた。一寸した事までが可笑しくつて、ラスチック老爺が火のついた烟管を、さも大切さうに脱いである帽子の中へ藏つたので笑つた。老爺の赤い鼻頭へ、煩さく蠅が止まりに来るので、その度に笑ひ聲を立てた。珈琲が來た後で、男爵は濱へ午睡に行つた。ジャンヌと子爵はそこらへ散歩に出掛けた。少し歩いた後で、二人は日陰に頭を入れ、日向に脚を出して腰を掛けた。そして低い聲で様々な事を語り合つた。お互ひの心が率きつける儘に、二人は注意して、『貴方』『貴嬢』と呼ぶやうにとめて居た。眼で微笑んだり、視線を交したりせずには居られなかつた。

『妾、ほんとに旅行がしたくつて。』

と、歸りの船の中で、長い事黙つてゐた後で、ジャンヌが言ひ出した。

『然し一人で旅行をするのは、餘り面白いものではありません。やはり御自分の印象を打ち明ける事の出来る伴侶が必要ですなあ。』

と子爵が答へた。

『それはさうですわねえ。』と、ジャンヌは凝と考へて、

『けれども妾、やつぱり一人で旅行し度いと思ひますわ。人が傍に居ないと、いろく空想を致して見ますの。』

『ですがね、二人だと未來の幸福をもつと可く計畫する事が出来ますよ。』

子爵は令嬢の顔を凝と見詰めながら言つた。ジャンヌは伏目になつて、この人はどんな意でこんな事を言ふのだらう、と思つた。そして遠く水平線の向ふを見るやうに眼を上げたが、淑やかにかう言ひ出した。

『妾、伊太利へ行つて見度うございますの。それから希臘へ。それからコル

シカへも。」

子爵が瑞西の話の初めた時、令嬢は全然歴史のないコルシカか、古い聯想を有つた希臘へ行つて見度いと話した。ジャンヌより實際的な子爵は、

「さう。だが、私ならば英國へ行き度い。何しろ教練的な國ですからなあ。」
と言つた。

黄昏は非常に短かつた。空は直ぐ暗くなつて、星の光に飾られた。令嬢と子爵とは列んで坐つて、船の後に震へてゐる燐光を見やりながら、淡い夜の空気を吸ふ事にさへ、鋭い悦びを感じた。腰掛の上へ置いたジャンヌの手の上に、子爵の指が静かに載つてゐた。ジャンヌはこの僅かな接觸にも幸福を感じて、逡巡しながらも其の儘にしてゐた。

この晩、ジャンヌは自分の部屋へ歸ると、一寸した事にも泣き出し度くなる程興奮してゐた。ジャンヌは今何物をでも接吻する事が出来る。抽斗の底深く納ひ込んである古い人形の事を想ひ出したので、それを出して來て温い接吻を

した。そして人形を袴と抱き緊めて思ひ沈んだ。子爵があの人だつたのか、ジャンヌは子爵の事を考へるとよく吾を忘れたり、又子爵の事が念頭を去らなかつたりしたので、あの人を愛し初めたのだと心付いた。子爵を見ると直ぐ心が騒ぎ、その眼を見合ふと、顔が赤くなつたり青くなつたりし、そして其の聲を聞くに慄然とするのだつた。その晩、到頭ジャンヌは寢られなかつた。

戀を想ふ心が日にまし増えて來た。ジャンヌは自分が愛されて居るのか居ないのかを試す爲めに、雲や雛菊に訊いたり、銀貨を空に投げて占つて見たり許りしてゐた。

『ジャンヌや、明朝は綺麗にお化粧をしてお置き』

ある晩、父親がかう言つた。

『何故でございますの、お父様。』

『いや、それは秘密だ。』

と男爵が答へた。明る朝、瀟洒した夏の衣裝で、ジャンヌが二階から降りて

来ると、客間の卓子テイナルの上は、糖菓ボンクの箱で一杯になつてゐて、椅子の上には大きな花束が一つ乗つてゐた。『御菓子製造業、婚禮御料理調理人、レラ』と書いた馬車はまが門口を入つた。料理女は人に手傳はせて食欲そくを嗽そくる匂ひの高い籠かごを澤山取り卸した。

間もなく子爵が来た。注意を凝らした扮粧つくりが、何時もの子爵とは別人に見えた。ジャンヌは初めて會つたかのやうに喫驚びっくりした。そして一點非ひの打ち所どころもない紳士だと思つた。子爵は莞爾にっこり笑つて訊ねた。

『お母さん、お支度は出来ましたか。』

『まあ、何を被仰おしやるの。何の事でございます。』

ジャンヌは吃り／＼聞き返した。男爵が引き取つて、

『今直ぐに判るよ。』

と答へた。馬車とこが扉口の前へ着くと、夫人は立派な装なりをして、ロザリーの腕うでに扶たすけられながら階段はしを降りて来た。ロザリーが子爵の様子を恍惚うつろと見惚みとれて

ゐたので、男爵が、

『お、小間使が貴方あなたに見惚みとれて居ます。』

と眩つぶやいた。子爵は髪かみの根まで眞赤まつかになつたが、男爵の言詰ことばが聞えなかつたやうな風ふうをして、大きな花束をジャンヌに捧さげた。ジャンヌは再度喫驚にどびっくりで、それを受け取つた。そこで四人は馬車に乗り込んだ。出発の前に飲いむやうに吩咐いひつけて置いた冷ひやした肉湯ブロスを、夫人の所へ持つて来た料理女が、

『まるで御婚禮のやうでございますねえ。奥様。』

と、大きな聲で言つた。

一行は『ジャンヌ』と名付けた新しい船の洗禮式ちんれいしきに急いだ。子爵は令嬢れいじやうに腕うでを借して、その行列の先頭に立つた。二人は教父母ちやうふぼとしてこの儀式ぎしきに列つらなつたのである。牧師ぼくしは花束で飾られた船の中を、聖水せいすいで淨きよめながら歩いた後あとで、手てを取交とりかして立つてゐる二人の教父母ちやうふぼの前へ立つて、眩つぶやくやうな祈禱いのりを初めた。青年の顔は何ともなかつたが、令嬢は胸むねの動悸どうきに呼吸いきも吐つけない許ばかり、氣の遠

くなるやうな心持で、齒の根の合はない程慄へてゐた。長い事幾度も令嬢を訪れてゐた夢が、不意に現實になつたやうで、令嬢はこの式が結婚式のやうだと言つて居るのを聞いた。牧師は祝福の辭を述べ、白い法衣を着た人達は祈禱を唱へてゐる。——ジャンヌは正しく結婚式に立つてゐるのだ。子爵はジャンヌの指が神經的に慄へるのを覺えたらうか、子爵の心は令嬢の心に同じたらうか、凡てを忘れて了ふ戀の夢に支配されてゐると感じたかどうか。或は、女達は自分を拒むことは、決して出来ないといふ事を知つてゐる。それが子爵をしてジャンヌの手を最初は軟かに、漸次強く、畢ひには痛くなるまで強く握らせたのか。子爵は何人にも心付かれないやうに、顔容も變へずに明瞭と言つた。

『ねえ、ジャンヌさん、貴女さへ宜しければ、これは約束の式ですよ。』

『え、』と言ふ意なのであらう。ジャンヌは一寸嬌態をして頭を下げた。その時、聖水が二人の手の上に滴つた。

式が終つて、食事に歸つた。食事が済むと庭は漁夫達の爲めに充てがはれた。

男爵夫妻は牧師と一緒に『運動』を初めた。二人の若い者は森の方へ行つて、迂回してゐる小徑を歩いた。不意に子爵はジャンヌの手を握つて、

『ねえ、被仰つて下さい。僕の妻になつて呉れますか。』

令嬢が頭を垂れたので、重ねて言つた。

『お願ひです。お返辭をして下さい、ね。』

令嬢は眼を上げて男の眼を見た。子爵はその眼眸の中に令嬢の返事を讀んだ。

三

船の命名式があつてから間もないある朝、ジャンヌが未だ起きない先に男爵は部屋へ来て、寢臺の裾に腰を掛けた。

『ラマアル子爵がお前の所へ結婚を申し込んで来たよ。』

と言つた。令嬢は被覆の下へ顔を入れ度かつた。男爵は莞爾しながら言ひ續けた。

『改めてお返事致します。』と云つて置いたがね、私等はお前に相談をしないで、何でも極める事は好まない。お母様も私もこの結婚が不承知ではない。と同時に申込に承諾もしなかつた。先方よりもお前の方が財産がある。が大事の場合に金銭の事を考へる可きではない。又先方は係累がない。お前があの人と結婚すれば、私等は息子が一人出来ると言ふものだ。もし又お前が他へ嫁ぐやうになれば、お前も全然知らない人の中へ行くのだし、私等も娘を失す譯だね。あの人は私等の氣に入つてゐる。が、お前の氣に入つてゐるかどうかと言ふことが問題なのだ。』

『お父様、どうぞ然らなすつて下さいまし。』

令嬢は髪根まで眞赤になつて、吃り／＼斯う言つた。

男爵は令嬢の眼を凝と見たが、微笑して、

『私もさう思つてゐたのだよ。』と言つた。

ジャンヌはその日、自分の爲てゐる事が解らなかつた。是れと言つた事もし

ないのに、悉皆疲れて了つたやうな氣がして、只器械的に動いてゐた。晩になつて子爵が来た。青年が靜かに歩み寄つて来た時、ジャンヌの胸は激しく鼓動した。子爵は夫人の指に接吻してから、令嬢の手を唇に當てて、長い感謝の接吻をした。

幸福な婚約期が初まつた。そして六週間目の八月十五日に式を済ませて、新婚旅行に立つやうに定められた。行く先を訊かれた時、ジャンヌは以太利よりも、孤獨で居られるやうにコルシカを撰んだ。それ程堪へられないと言ふのではないが、唯ぼんやりもつと熱烈な抱擁を望みつゝ、二人はその日の來るのを待つてゐた。今は只弱い抱擁や手を引いたりする事や、相手の心を讀まうとするやうに、ちつと眼を見詰める事ぐらゐで満足した。

その月の下旬、蒸熱い口中から掛けて、人の魂の裡に秘んでゐる詩を引き出すやうな、よく晴れた温い晩のこと、月が昇つて、菩提樹と鈴懸の陰影が、草の上に落ちた。草は森の陰の方までも續いて、そこで見えなくなつてゐる。美

しさに堪らなくなつて、ジャンヌは父親の方を向いた。

『妾達、草の上を歩いて來ても好ござんすか。』

『うん、好しく。』

男爵は骨牌から目も逸らさないで言つた。ジャンヌと子爵は庭のはづれの小さな森のある所まで、草の上を歩いて行つた。二人の戀人は自分達を取り圍んでゐる詩の力を感じたので、お互に黙つて手を握りながら、あちこちと草の上を散歩してゐた。ジャンヌは窓の灯影を見て、

『まあ、リゾン叔母さまが見て被居しやるわ。』

『あゝ、さらですな。』

子爵は自分が何を言つてるのか、考へて居ない人の物言ひをした。二人は靜かな散歩と戀の夢を續けた。その中に露が降りてゐるので、冷々として來た。

『もう家へ入りませう。』

ジャンヌが言つた。二人が客間へ入ると、其處には結婚式に招ばれて來た夫

人の妹で、處女の時分からエルサイユの修道院に寄宿生活をしてゐる叔母のり
ズンが、眼を眞赤に泣き膨らして編物をしてゐた。二人はそれに一寸も心付か
なかつたが、子爵は偶とジャンヌの薄い上靴が濡れてゐるのに氣が付いて、

『貴女の小さい足が冷くはないの。』

と優しく訊ねた。是れを聞くとリゾン叔母さんの指は、編物を持つてゐられ
ない程慄へた。毛糸の球が床に轉げた。両手で顔を隠して、痙攣るやうに泣き
出した。二人は驚いた啞者のやうに黙つて、呆氣に取られて見てゐたが、その
中にジャンヌは怖くなつて來たので、叔母の傍へ身を踴めて、顔へ當てた手を
引き離した。

『どうなさいまして、叔母様。』

と訊ねた。老嬢は身體中を慄はしながら、取り亂した聲で吃り／＼言つた。

『あの方が、貴女に……小、小さい足が冷め、冷たくはないかつて、被仰る
のを聞いて、わ妾には只の一度も誰もそんな言を、云つた者がなかつた、と思

つたらば。』

ジャンヌは氣の毒だつたけれど、誰れかがリゾン叔母を戀すると思ふと可笑しい事に思つた。子爵は笑ひ度いのを誤魔化さうとして傍を向いた。老嬢は慌てゝ客間を出て、暗い階段を手探りで、自分の部屋の方へ上つて行つた。二人は氣の毒だと言ふよりは、可笑しく思つて顔を見合はせた。

『氣の毒な叔母様』とジャンヌが呟いた。

『今夜はちつとどうかして居るやうですな。』と子爵が答へた。

二人は『お休みなさい。』を言ひかねて、手を取つてゐた。で靜かに叔母の坐つてゐた椅子の前で、最初の接吻をした。翌日、二人はもう憐れな老嬢の事などは綺麗に忘れてゐた。

結婚の日が來た。式の最中でも、ジャンヌは氣を取り直して落着く事が出来なかつた。結婚した。自分は結婚した。自分の周圍は悉皆變つた。ジャンヌは此の變化を眼の廻るやうに覺えた。最早處女時代を過ぎて、一人前の女になつた。

た。

式が済んで、花嫁のジャンヌと花婿のジュリアン(子爵の通稱)とは、日光を避けて木間の山徑へ分け入つた。徑は並んで歩く事の出來ない位狭かつた。男は女の後に手を廻した。ジャンヌは黙つてゐたが、胸は波立ち、呼吸が忙しくなつた。木の枝が觸りさうなので、二人は時々屈まなければ通れなかつた。ジャンヌは木の葉を一枚取つた。葉裏には貝殻のやうな赤い綺麗な太陽虫が二匹附着いてゐた。

『御覽なさいまし。これ夫婦ですよ。』

ジャンヌは、少し安い心持になつて無邪氣なことを言つた。

『今夜、貴女は私の愛する妻になるんですね。』

ジュリアンの口が女の耳を掠つた。『おや、まだ妻になつたのではないのか知ら。』と、詩的な戀だけを知つてゐるジャンヌはさう思つて、男の云つた事が判らなかつた。男は女の頸の上に接吻した。ジャンヌが驚いて身を引いた時、森の

端れまで来てゐたのが判つた。そして家からこんなに離れたので、少し周章た。立ち止つて、

『もう歸りませう。』と言つた。

男は女の手を離したが、向きを變る拍子に、男の呼吸が女の頬にかゝる程顔が近く向ひ合つた。二人は心を見通すやうに凝と見合つた。お互に二人は何だらう。二人が初めようとしてゐる生活はどんなものだらう。どんな悦び、どんな後悔を二人に取り除けられてあつたか。男はジャンヌの肩に手をかけて、今までにした事のない接吻を唇に與へた。ジャンヌは悦びに上氣せて慄へた。もう少して地上に倒れさうになつたので、ジュリアンに縋り附いた。

『歸りませう、歸りませう。』

妻は吃つた。二人は手を組んで、黙つて歸つた。

食後、男爵夫婦は何か低聲で諍ひをした。夫人はいつもより一層呼吸苦しうに、良人の吩咐を斥けてゐるやうだつたが、到頭大聲を出して、

『いゝえ、妾には出来ません。何と言つて好いか知りませんから。』と言つた。男爵は荒つぽく其處を離れて、ジャンヌの傍へ來た。

『おい、一寸歩いて來ないか。』

『ええ。』ジャンヌは少し不安さうに返事した。

戸外へ出ると、父親は娘の腕を取つて引き寄せて、それを優しく握つた。數分間黙つて行つたが、父親は何と切り出して可いか定らなかつた。が、到頭、初めた。

『ねえ、本來言ふとお母様が爲るのだが、私が難かしい役廻りに當つたのさ。お母様が厭だと言ふから、それで私が代りを勤めるのだ。お前がどれ程世間の法を知つてゐるか、私は知らないが、子供、殊に女の子には知らせずに置かなか

やあならない事がある、と言ふのは、親に代つて娘の幸福を計つて呉れる男子の手に任せるまで、娘は心身共に清淨潔白でゐなければならぬからだ。人生の歡しい秘密の上を蔽つてゐる掛怕を除くのはその男の義務なのだ。が娘

達と言ふものは、得手空想とは違つた、或る幾分か亂暴な現實の爲めに駭かされるものだ。精神を、いや肉躰までも傷けられて、娘達は：：あゝ、私はこの言ふ事が出来ないが、お前これだけは覺えて置くのだよ。お前はもう良人のものだと言ふことだけをな。』

ジャンヌは何を知つて居たらう。そして何を推測したらう。ジャンヌは慄へ初めた。氣が鬱いで、何か恐しい事のありさうな氣がした。二人が中へ入ると客間の戸口で喫驚して歩を止めた。夫人がジュリアンの肩に凭れて啜り泣きをしてゐた。夫人の騒々しい涙は身躰から搾り出されるやうに見えた。驚いた子爵に、可愛い娘を親切にしてやつて呉れと泣いて頼んでゐる。子爵は大きな婦人の身體を、自分の腕で支へてゐた。男爵は夫人の傍へ行つて、

『そんな騒ぎをしないで呉れ。涙は不吉だ。』

と言ひながら、涙を拭いてゐる夫人を眩掛椅子に掛けさせて、ジャンヌの方に振り返り、

『お母様に接吻してお休み。』

と言つた。ジャンヌは泣き出しさうになつて、両親に接吻すると、直ぐ自分の部屋に駆け込んだ。涙を流してゐるロザリイに着物を脱がせて貰つたが、ロザリイの手が慄へて、紐や留針が掴めなかつた。主人よりもつと感動してゐるやうだつたが、ジャンヌには氣が付かなかつた。ジャンヌは他の世界へ入つてやうな、今まで愛してゐたものから引き離されて了つたやうな心持がした。そして自分の生活といふものが轉覆つて了つたやうに思つた。

『自分はほんとに良人を愛してゐたのか知ら。』こんな奇妙な考へが浮かんで來た。三日前までは現世に居ることを知らなかつた人の妻なのだ。どうしてこんな事になつたのか。人間と言ふものは皆その先きに口を開いて待つてゐる洞穴へ陥るやうに、結婚と言ふものゝ中に陥るものか知ら。寢衣に更へて寢床へ滑り込むと、冷たい敷布にゾツとして二時も前から心を押してゐた寒いやうな悲しいやうな寂しいやうな思を増した。ロザリイが啜泣きをしながら出て行つ

た後で、横たはりながら、父親が紛れた語で閃めかした、少しは察した事を、案じながら待つてゐた。誰れも階段を登つて来る様子がなかつたのに、静かに戸を叩く音が三度した。ジャンヌは愕然として返事をしなかつた。續いてもう一つ叩く音がして、把手の廻るのが聞えた。ジャンヌは盗賊が入つて来たやうに蒲團へ潜つた。床に靴の音がして、誰れか寢床に觸つた。もう一度ジャンヌは驚いて身を立てた。頭を出すと、ジュリアンが微笑みながら立つてゐた。

『まあ、喫驚した。』

『では待つてたんではないのですね。』

ジャンヌは寢床にゐるのを、ジュリアンに見られるのが怖い程恥しかつたから黙つてゐた。

『僕を愛して呉れますか。』

『前から愛してゐるぢやありませんか。』

『貴女は僕をほんとに愛してゐるんですか。』

この質問はジャンヌを怖がらせて、同時に父親の言つた事を思ひ出させた許りだ。ジャンヌは自分では何を言つてるのか知らずに夢中で言つた。

『妾は貴方のものです。』

ジュリアンは部屋へ歸つて、大急ぎで着物を脱いだ。ジャンヌは衣摺れの音、衣兜の金がチャラ／＼と鳴る音、床に當る靴の音などを聞いた。ジュリアンは部屋へやつて来た。

ジュリアンは堪へ難いやうに、低い聲で言つた。

『では、僕の可愛い小婦ではないんですか。』

『前から貴方の妻ぢやありませんか。』

ジャンヌは顔を隠してゐる手の間から言つた。

『さう人を馬鹿にするものぢやありません。』

ジュリアンのかう言つた聲は、少し癢に觸つたといふ調子だつた。ジャンヌは悲しくなつた。男の方を向いて謝罪らうとした。ジュリアンは女の腕を取つ

て、顔に頭に熱い接吻をした。ジャンヌは顔から手を除つて、ぢつとして居た。不意に鋭い痛みを感じるまで、ジャンヌはぼんやりして何にも解らなかつた。：：辛つと考へる事が出来た。ジャンヌは全く違つた事を豫期してゐた。希望が破れ、歡樂が碎かれた絶望の念で一杯になつて、

『あの人が妻と言ふのは是れなのだ。是れだ、是れだ。』と言ふより外はなかつた。

悲しい思ひをしながら、ジャンヌは長い事さうしてゐた。と、ジュリアンが半分口を開いて穩かに寝てゐるのを見た。眠つてゐる。ジャンヌはそれが信じられなかつた。そしてジュリアンの獸慾よりも残酷に思はれて腹が立つた。どうして今夜寝る事が出来るのか。すると今二人の間に起つたやうな事は、この人には格別新規な事ではないのか。ジャンヌは眠つてゐられるより、男が自分を撲つか、さもなければ忌はしい目に會はせて意識の失るまで傷けて呉れば可いと思つた。

日の光が、初めはぼんやりと、それから明るく、それから淡紅色に、それから輝いた。ジュリアンは眼を覺して欠呻をして、妻を見ると微笑んで訊ねた。

『昨夜お前よく睡られたかい。』

ジャンヌは、『お前』と言はれたのに心付いて、驚いた。

『え、貴方は。』

『俺か、よく睡れたよ。』

八時を打つと、良人は自分から起き上つて、『さあ、起きようぜ。今日遅くまで寝てゐると、白痴に見えるから。』と言つた。妻の服装を手傳つてやつて、それから階下へ降りた。ジャンヌは晝まで二階を降りなかつた。其の日は別段變つた事もなく、まるでいつもの通りに經つた。唯、別な男が一人家に居るだけだつた。

結婚の日から四日経つて、若夫婦はマルセイユへ立つので馬車が来た。最初の晩の煩悶以来、一番親密な関係だけはどうしても厭だつたが、ジャンヌは直ぐジュリアンの接吻や抱擁に馴れた。夫人は馬車が出ようとすると、重い財布を娘に渡して、欲しい物を買ふやうに言つた。その晩、幾何入つてゐるかと言つた。ジュリアンに訊かれた時、ジャンヌは財布の事も忘れてゐたので、膝の上へ開けて勘定した。金貨で二千圓入つてゐたから、種々な物が買へると手を拍つて言つた。船から上る時、ジュリアンは低聲で、『給仕に一圓やれば可いだらう、ねえ。』と妻に言つた。この一週間、ジュリアンはジャンヌの嫌ひなこんな事ばかり訊ねた。さういふ時には、『澤山おやりなされば可いでせう。』と少し怫然として答へた。ジュリアンは誰を掴へてもよく値切る、勘定書に文句を付けてジャンヌを厭がらせた。僅とばかりの心付けをやつて、給仕達が馬鹿にしたやうな眼付をすると、ジャンヌは髪根まで赤くなつた。宿屋へ着いてからジャンヌが町を歩かうと言ひ出すと、ジュリアンは妻を両手で抱いて、耳の傍で言つた。

『一寸階上へ行かう、ねえ。』
 『階上へ。妾ちつとも疲れて居りませんの。』
 ジャンヌが驚いて言ふと、妻を胸に抱きしめながら、
 『何を言つてるんだ。二日間も二人きりにならないぢやないか——。』
 ジャンヌは忽ち赤くなつた。ジュリアンは呼鈴を鳴らした。妻は何にも言はずに、自分が恥と墮落で従つてゐる良人の慾望に胸を悪くしながら、目を伏せてゐた。ジュリアンは『直ぐ用意して呉れ、旅をしたので草臥れてゐるから。』と言つて、部屋の用意をさせた。給仕人がクスリとしたので、ジャンヌは逃出し度いやうに思つた。二階から降りて来た時にも、給仕達の傍が通り切れなかつた。そして良人が少しも自分の心持を察して呉れないので、この人の氣の附かないのを訝んだ。これが二人の間に障壁を作つて、二人の人間が全く同化する事は出来ないものといふ事をジャンヌに悟らせた。
 コルシカに三日滞在してゐる間、二人は馬で諸所を見物した。ジャンヌは景

色の美に打たれて、汗を流して良人の手を握り緊めた。ジュリアンは吃驚した。ジャンヌは『神経でせう。』と言つたが、ジュリアンには判らなかつた。只ヒステリーのやうな馬鹿げた涙だと思つたから、馬に氣をつけるやうに、険しい道を見て注意した。長い間歩いたので、非常に咽の渴いた二人は、泉の所へ行つて跪いて飲んだ。ジュリアンは妻の身體を抱くやうにして、二人は水の出る木の管の先端を唇で奪合ひした。ジャンヌはふと戀の念を感じた。水を一杯口に含んで、夫を膀胱のやうに膨らましながら、自分の口から飲めと良人に知らせた。ジュリアンは咽を長くして、頭を後へ引き、腕を開いてこの燃え上らせるやうな生きてゐる泉からグツと飲んだ。ジャンヌは何時にも愛情をこめて、良人の肩に凭れた。その胸は躍り、その眼は情に充ちて優しく見えた。『ジュリアン、妾貴方を愛してきますの。』と囁いた。ジュリアンは妻を引き寄せた。ジャンヌは自分から身を投げかけて、羞恥の爲めに手で顔を隠した……。二人はレグホオン、フロレンス、ゼノアと廻つて、十月の十五日に再びマル

セイユへ歸つて來た。ジャンヌはせめてもう四日ばかり此地に居たいと頼んだけれど、どうしても出發する事になつた。巴里で種々の物を買ふ事に極めておたので、ジャンヌは巴里へ着いた明の目、コルシカで宿をして貰つた若い女に約束した、奇妙な送物、短銃を買はうとして、ジュリアンが預かつてやると言つて取つた財布の金を少し貰はうとした。ジュリアンは面白くなささうに言つた。

『幾何要るんだい。』

『え、幾何でも。』

ジャンヌは驚いて答へた。

『百圓やらう、何を買つても可いが、妾みに費つちやあ可けないぜ。』

ジャンヌは、何と言つて可いか判らない程慌てた。がおづ／＼切り出した。

『でも、其のお金は。』

『判つてるよ。だが皆二人の物だから。お前が持つて居ようと、私が持つて

居ようと同じ事だ。私は何もやらないと言ふんぢやないよ。え、そら、百圓やらうと言つてゐるぢやないか。』

ジャンヌは其の上何も言はずに、金貨を五個貫つた。もう夫れ以上下さいと言はなかつた。で、短銃の外何も買へなかつた。

一週間経つと、二人はレ・ビュールへ向けて出立した。

五

若夫婦が旅から歸つて來た時、一番興奮して居たのはロザリイだつた。ジュリアンは其夜旅行の疲れを言ひ立て、妻の部屋を訪れなかつた。結婚この方ジャンヌは初めて一人で寝た。唸るやうな風が家の周囲を吹き暴れるのを耳にして、何時までも眠らずにゐた。

間もなく二人の關係は變つた。ジュリアンは新婚旅行が済むと、持役を勤めて來た俳優のやうに別人になつた。以前ジャンヌを迷はせたあの美しい所はなく

なつて、物持の百姓といふ風に手も顔も汚くなつた。食事の後で火酒を飲むやうになつた。そしていろ／＼と家事の改革をしたのが、舅の男爵の氣に入らなかつた。今その良人を冷やかに、殆んど他人のやうに見る事の出來るジャンヌは、良人のする事を兩親と一緒に笑つた。ジュリアンは屢々男爵と衝突した。老人夫婦はルウアンへ行く事になつて居たので、早速レ・ビュールを立つた。立つ前の晩、ジャンヌは父親と散歩して、『世の中といふものは、さう始終楽しい事ばかりあるものではありませんのねえ。』と諦めたやうに言つた。『さうとも。』と男爵は溜息を吐いて、『だがそれを何うする事も出來ないんだ。』と答へた。その後若夫婦は骨牌をやる癖がついた。ジュリアンが家の事一切を一人でやつて居るので、ジャンヌは何も爲すにゐた。時折もう一度元の處女になつたやうに仕事の手を止めて夢想する事もあつたが、良人がシモン老爺に用を吩咐けてゐる聲を聞くと、直ぐ現實の世界へ呼び返された。『あゝ、最早皆むかしの夢だ。』と思つて仕事を手にすると、巾に針を通してゐる指の上へ涙が落ちた。

鼻唄を誦ひながら用をしてゐたロザリイも、活々とした所が失せて、肥つてゐる頬肉が陥ち、肌が汚くなつた。ジャンヌは小間使が病氣に罹つたのではないかと思つて、訊いて見たが、ロザリイは頬を赤くして、「いゝえ。」と答へると、急いで逃げて行つて了つた。跳ねるやうにして歩いてゐた娘は、苦しきやうに部屋から部屋へ身體を引き摺つて行く。

一月の末に大雪が降つた。一晚の中に野原は眞白になつた。ジュリアンは長靴を穿いて、溝で渡り鳥を撃つてゐた。鐵砲の音が間斷なしに野原の凍つた沈黙を破つてゐた。其の音に驚かされて、林からは眞黒な鴉が飛び出した。その朝、ジャンヌはロザリイの容子が變なもので、「どうかおしかしい。」と訊いて見たが、小間使はいつものやうに、「いゝえ。」と言つた。その中にロザリイの姿が見えなくなつたので呼んだが、返事はなかつた。鈴を鳴らさうとして傍を見ると、ロザリイは臥臺の下に平太張つて鉛色の顔をして、硬ばつた手脚を投げ出してゐた。「どうしたの、お前。」と驚いて訊いたが、ロザリイは狂氣のやうな眼をして、

身體中の筋を固くならせ、齒を喰ひ縛つて苦しい聲音を押へつゝ、カタリと仰向に轉げた。ジャンヌは小間使の着物の下に、何やら動いてゐる物を見た。そしてこの世に生れた赤子の最初の苦しい泣き聲を聞いた。急に頭腦が亂れて、「ジュリアン、ジュリアン。」と良人と呼んだ。良人が「何だ。」と返事をしたので「ロザリイが大變ですよ。」と叫んだ。ジュリアンは階段を飛び上つて部屋へ入ると、娘の着物を取り除けた。下には皺の寄つた、恐しい、小さな人間の原子が弱々しい聲で泣きながら手足を動かさうとして轉がつてゐた。ジュリアンは険しい顔付で、「お前が出る幕ぢやあない。早くシモン爺とリュディヴィイヌを呼んで来い。」と言つて、面喰つてゐる妻を室の外へ突き出した。

やがて村の産婆のデンチュウといふ寡婦が来た。ジュリアンは難かしい顔をして、部屋の中を歩き廻つてゐたが、妻がロザリイの事を言ひ出すと、赤兒は家には置かれなと言つた。「里子にやれば好いぢやありませんか。」といふ妻の言語を終らせずに、「で、誰れが其費用を出すのだい。お前がか。」と訊いた。

暫く黙つてゐた後で、『子供の父親が拂ふてせうよ。その男がロザリイと結婚すればそれで宜しいのですわ。』とジャンヌが言ひ出した。ジュリアンは『父親。』と聞くと、『誰れが父親だか、お前知つてるか、知るまい。ええ、それで。』と亂暴に言つた。ジャンヌは子供の父親がロザリイを見捨てるやうな事があれば、その卑怯者は、可哀想な娘の代りに吾々が取り捌いてやる。と飽く迄言ひ張つた。ジュリアンは金を呉れて、赤坊ぐるみ何處へか投げ出してはうと言つた。ジャンヌがどうしても子供の父親を見つつけようと言つたので、怒つて部屋を出ながら、

『女てものは、ほんとに馬鹿だ。下らない事ばなり考へやがる。』
と捨臺詞を残して、ドンと扉を叩きつけた。

ジャンヌは毎日、病人を慰つた。赤坊は里にやつた。二週間経つと、小間使は用事が出来るまでに回復つた。ジャンヌはロザリイの手を執つて、

『ロザリイや、皆お話しね。』と正面に顔を見ながら言つた。ロザリイは慄へ

出して、

『皆つて、奥様。』とドギマギした。

『あの子の父親は誰れだい。』ジャンヌはいろ／＼にして聞き出さうとしたが、小間使は一言も口を開かずに、到頭、手を振り放つて狂人のやうに逃げ出した。で、晚餐の時に、良人にこの事を訴へた。そしてロザリイを誘惑した男の名を、良人に訊いて貰ひ度いと頼んだ。ジュリアンはブン／＼腹を立て、『お前が、彼女を置くと言つたから、置いたんぢやないか。俺はもう知らない。』と言つた。五週間といふもの、脆いキラ／＼した雪が地面に横たはつてゐた。雪折れの大枝がビシリと地面に落ちることもあつた。ジャンヌは自分の健康の優れないのは、天候の故だと思つて、暖かい春風を待つてゐた。食物の事を思つた丈で、胸の悪くなる時があつて、何にも喰べられなかつた。又少しの食物も消化すことが出来なくつて、食後に屹度吐げた。動悸が酷く、始終堪へられない程感動してゐた。

『から寒くつちやあ、一人ぢや逆も寝付かれないねえ、えゝ。』
 薪炭を恠むので、ジュリアンはガタ／＼慄へながら妻に言った。ジャンヌは
 良人の頸に兩手を巻いて、今夜は何だか大層苦しいが、明朝になったら屹度快
 くなるだらうと言つた。ジャンヌはその晩、寒氣と苦しきで眠るどころではな
 かつた。そして、『あゝ、死にさうだ。』と思ふと、恐ろしさに寢床から跳ね起き
 て、鈴を鳴らした。いくら待つても誰れも來ないので、跣足の儘ロザリーの部
 屋へ行つて見たが、寢床は冷たくて空だつた。それから良人の部屋へ入る前に、
 自分が死ぬのではないかと思つて、慌てゝ其處へ駈け込んだ。ジャンヌは突然、
 呀と叫んで立ち縮むだ。消えかけた爐の明りに、良人と枕を並べて寝てゐるロ
 ザリーの頭を見たのだ。その聲に二人は跳ね起きたが、ジャンヌは直ぐ自分の
 部屋へ取つて返して、それからもう二度と良人に會はない決心で、階下へ駈け
 降りた。良人の聲を耳にもかけず、臺所口から雪の夜の戸外へ出て、直走りに
 走つた。

『自分の生活は滅びて了つた。』ジャンヌはさう思つて崖から下へ飛ばうとし
 た。途端に兩親の事を想ひ出して、力なく雪の上に倒れた。
 ジャンヌは夢に魔れた。それは果して夢魔れたのであらうか。ジャンヌは白
 晝部屋で寝てゐた。何故だか起きられなかつた。すると床を引搔くやうな音がし
 て、小さい鼯鼠が一疋、敷布の上を走つた。一疋、又一疋、ジャンヌの胸に駈
 け上つた。やがて十疋、二十疋、百疋、千疋、そこから澤山の鼯鼠が出て
 來て、床の上一杯になつた。ジャンヌは一疋掴まへようとして手を伸したが、
 只空を掴むのみで、怒つて、泣いて、終ひには逃げ出し度くなつた。その間は
 かなり長いやうに思はれた。そして正氣付いた時、枕許に坐つてゐる肥満つた
 男と母親が眼に入つた。ジャンヌは良人とロザリーの事を母親に訴へたけれど
 も、夫人は悉皆娘の病氣にして了つて取り合はなかつた。男爵はジュリアンを
 詰つたが、ジュリアンはジャンヌの腦膜炎の故にして、凡てを打ち消した。三
 日目の朝、ジャンヌはロザリーに會ひ度がつて喚いた。醫者は手を執つて慰め

るやうに、

『奥様、落着いて被居い。興奮なすつては宜しくありません。貴女は妊娠して被居るんですから。』

と言つた。ジャンヌは醫者の言つた通り、自分の身中にもう一つ命があるのを感じて、不思議に思つた。それがジュリアンの子だと思ふと悲しくなつた。若し、父親に似てゐたら、と考へて怖毛を慄つた。

次の朝ジャンヌは牧師とロザリイと呼んで貰つて、ロザリイに懺悔を迫つた。小間使は泣きながら、ジュリアンがこの家へ初めて食事に招かれて来た抑々からの事を白状した。その日、男は屋根部屋に隠れてゐて、娘の部屋へ入つて来た。娘は人が聞くのを憚つて聲も立てなかつた。ジュリアンは娘を想ひ通りにした。娘はその事を誰れにも言はなかつた。ジュリアンを綺麗な男だと思つたからである。ジャンヌはふと自分もロザリイと同じくこの男を、『綺麗な男だ。』と思つた許りで、此の不幸、此の悲哀、絶望の中に陥つた。この娘の子供

は自分の子供と同じ父親を有つてゐる。立腹はやがて物憂い陰氣な絶望に變つた。

『妾達が旅から歸つて来た後で、且那樣は何時又お前の所へ被行つたの。』

『お歸りになつた、その晩です。』

小間使は床に倒れて答へた。一言々々ジャンヌの胸は轟いた。で、

『彼方へおいで。』と大きな聲で言つた。

牧師は娘を諭した後で、一度も妊娠しないで結婚する娘のないこの邊の悪習を話した。これは小間使を辯護した意なのだ。男爵は只ジュリアンの事ばかりを憤つてゐた。けれども牧師に當てつけられて見ると、自分にも同じやうな經驗があつた。それも一度や二度ではない。婢女が美しかつた時は、家に妻が居ようと居まいと構はなかつた。だのに何故ジュリアンのした事ばかりを責めなければならぬのか。

ロザリイを出すといふ事で、牧師は若夫婦を和解させた。

六

七月の末まで何事もなかつたが、或る夕方、ジャンヌが眞青になつて、呀と言ひさま臍腹を押へて苦しみ初めた。子供は九月まで生まれたいと思はれて居たが、それでも若しやと懸念して、シモンを醫者へ馬で馳けさせた。醫者は月不足の出産の徴候だと言つた。ジャンヌは死んだやうに力がなくなつてゐた。絶えず低い呻き聲を立てた。二時間許りさうしてゐたが、晩近くなつて又苦しみ初めた。責め苛まれるやうな苦痛に、『あゝ、死にさうだ。もう死ぬ。』と思ふ程、苦しい痙攣に襲はれた。心は烈しい憎しみて一杯になつた。苦痛の原である眼前の男と、自分を今殺しさうにする此の子供とを、呪はずには居られないと思つた。ジャンヌは苦痛から逃れようとして、精一杯、あらゆる筋に力を入れて息張つた。と腹中の物が悉く流れ出るやうな氣がして、苦痛がズツト減じた。生れた子はビエル・シモン・パウルと名付けられた。八月の末に洗禮を受け

た。男爵とリゾン叔母さんが教父母に立つた。

ある日の夕方、食後に牧師が訪問して、ロザリーの一件を片附けに來た。で到頭、二萬圓の價格のあるバルヴィイル畑地をやつて、娘をノルマンデイイの百姓に娶すやうにした。百姓のドジレ・ルコオは、牧師は二萬圓と言ふが、此方の旦那様は千五百圓だと言ふ、何方が眞實かと男爵の所へ確めに來た。『二萬圓なら貰ひますが、千五百圓では。』と言つて狡猾な様子をした。で、二人は日曜日の朝結婚した。ドジレ・ルコオは近邊で仕合者だと言はれた。ジュリアンは此の結婚を聞いて、男爵夫妻と諍つたので、二人はルウアンへ歸る期を早めた。ジャンヌは以前ほど兩親の立つのが悲しくなかつた。何故と言ふに、ジャンヌの望みも思想も、子供の上に集注されてゐるからである。

十二月になつて身體が舊に戻ると、ジャンヌは良人と二人で、嘗て訪問を受けた近隣のフウルヴィイル伯爵家を訪れた。伯爵夫人は二人を歡待した。ジャンヌは家にパウルが待つてゐると思ふと、心ならずも良人に従がつてゐた。食

事の前に、客間で伯爵は子供を抱くやうに夫人を抱いて、その頬に情の籠つた接吻をした。ジャンヌは鬼のやうな髯男を見て、『ほんとに好い方だ。人間と言ふものは、間違つた考を人に起させるものね。』と思つて、ジュリアンの粧した顔を見た。ジュリアンは扉口に立つて、この有様を見てゐたが、顔の色が酷く青褪めてゐた。ジャンヌは驚いて傍へ寄つた。

『貴方どうなすつて、お加減が悪いの。』

『何でもない。一寸寒氣がするだけだ。打捨つといってお呉れ。』

と突慥食に答へた。

一週間経つて、今度はクウトリエ侯爵家を訪問したが、侯爵夫妻は冷淡で、

その癖高振らない人に見られ度いと思ふ心から、お役で待遇つた。二人は不愉快で仕方がなかつたが、漸う暇を告げて戶外へ出た。歸り道にジュリアンが、

『どうだい。もう他の人は訪問し度くないね。フルウヴィール家だけで朋友は澤山ぢやないか。』と言つた。ジャンヌもそれに同意した。

暗い淋しい十二月が徐々と経つた。ジャンヌは子供の事で佗しい思ひ一つせずに暮らした。只良人が少しも子供に接吻してやらないのを口惜がつた。ジュリアンはパウルを見るのを嫌つてゐるといふ風だ。近頃素敵に親密になつたフルウヴィール伯爵は、子供が好きなので、來ると歸るまでパウルを膝にのせて、母親のやうな接吻をした。子供のないのが、この人の一番の苦勞なのだ。三月になつて、伯爵夫妻とレ・ピューブルの夫婦とはよく馬で野原へ出た。ジャンヌは伯爵が狂氣のやうに夫人を愛してゐる事に氣が附いた。夫人はこの日頃楽しさうで、出来るだけ澤山レ・ピューブルを訪れて、笑つたり跳ねたりしてジャンヌに接吻した。何か幸福の源泉を見つけたといふ風だつた。伯爵は伯爵で、只管夫人を慕つてゐた。或晩ジャンヌに向つて、『私達は前よりもずつと幸福になりました。家のギルベルトは情が深くなつたのです。今まで彼女が私を愛して呉れるかどうか、確かでなかつたのですが、今日になつてそれが判つたのです。』と言つた。一方ではジュリアンも愉快らしく、機嫌が好かつた。

或る朝、ジュリアンは夜明に何處へか出て行つたので、ジャンヌは白馬に鞍を置かせて出掛けた。ジャンヌはジュリアンと二人で坐つた彼のエトルタの森へ分け入つた。すると長い徑の端れに二疋の馬が立木に繋いてあるのが見えた。ジャンヌは一眼でそれがギルベルトと良人の馬だと言ふことが判つた。で、急いで二人の方へ行かうとすると、道端の原の上に女の手袋が片方、それから鞭が二本置いてあつた。二人は何をしてゐるのだらう。ジャンヌには判らなかつた。偶と此の手袋と鞭と乗手の居ない二頭を馬を見直した時、疑ひが起つた。そして一刻も早くこの場を去り度いといふ心に驅られて、自分の馬に跨つた。そして飛ぶやうに家へ歸りながら、何もかも判つたやうに思つた。が直ぐ冷かになつて、嫉みも憎みも感じないで、只侮辱ばかりを感じた。家へ歸るとジャンヌは子供を連れて部屋へ入つた。ジュリアンは上機嫌で歸つて來たが、夕飯の時、妻を喜ばせようと、いろ／＼謀んで、『今年はお父様やお母様はおいでにならないのか、ねえ。』と言つた。妻は夜中かけて直ぐ來るやうに兩親へ手紙を

書いた。直ぐ返事が來て、それから六日目に老人が着いた。二人とも變つてゐたが、殊に母親はめつきり老けてゐた。或る日の午後、ジャンヌがパウルを抱いて野に出てゐると、家の者が、『奥様、御隠居様がお悪うございます。』と呼んだ。ジャンヌは冷水を背筋に滴されたやうに慄然として駈けて歸つた。夫人は鈴懸の木の下で倒れたと言ふので、地面に臥てゐた。醫者が來て診察したが、もう駄目だつた。ジャンヌは絶望の餘り、どうしたら可いかを知らなかつた。ジュリアンは悲しさを態度もせず、困つたといふ風で、『私は豫期してゐたよ。もう長い事はあるまいとね。』と低聲で言つた。やがて牧師が來て、跪いて祈禱をした。そして、『聖いお方だつた。』と言つて部屋を出た。

ジャンヌはその夜、何も喰はずに、唯一人で通夜をした。部屋の戸を閉めると窓を二つ開けて、母の死顔を見た。蠟燭の灯を慕つて來た翅の大きな虫が一匹、壁に衝突しながら室内を飛び廻つた。ジャンヌはそれを見ようとしたが、只白い天井に陰影の飛んでゐるのを見たばかりだつた。虫の騒ぎが止むと、隅

と掛時計の他に、もう一つ幽かに騒がしい音のするのに気がついた。それは着物を脱がせた時、取るのを忘れた母親の懐中時計の秒の音だつた。母親が死んで横になつてゐるのに、此の小さな機械が猶ゴチ／＼動いてゐるといふ事が、新規な悲しみの種子となつた。時計を見ると、未だ辛と十時半なので、先の長い夜を思ひやつてジャンヌは慄然とした。

ジャンヌは、『紀念品』と稱する母親の手紙を取り出した。一代前の匂ひのする舊式な手紙である。ジャンヌは死んだ人を慰めるやうに、それを聲高く讀み上げた。中にはこんなのもあつた。『小生は、卿の接吻なしに生きられぬ者に候。小生は狂氣の如く卿を愛す。』として署名もないが、裏には正しくル・ブルトイ・デ・ヴオオ夫人宛である。次のは『今夜かの人外出なされなば、即刻御いで願度候。少なくとも一時間はお話出来申す可く候。』三つ目が『小生は戀と悶えの一夜を明し申し候。わが腕に抱ける卿を、わが唇の下に震へる卿の唇、わが眼に見入れる卿の眼を想ひ、更に今この時、卿が彼の人の抱擁の中に、かの人の傍に

眠ると思へば、窓外へ躍り出づるを禁じ難く候。』ジャンヌは同じ手蹟の同じ文句の、そして最後には訖度、『必ず火中の事』と書いてある幾通かの手紙を見た。最後に食事に招かれた返事に『パウ・ダンヌマアル』と署名してあつた。男爵がよく、『可哀想なパウ・老人』と呼んだ其の男が、男爵夫人の親友だつた。ジャンヌは矢庭に忌はしい手紙を投げすて、窓側に走り寄つて泣いた。窓掛で顔を隠して長い事泣いてゐたが、ふと隣室の人の氣勢に、父親が入つて来ては一大事と、夫等の手紙を纏めて爐の中へ積んで、蠟燭を取つて紙の山に火を點けた。爐の底に、灰の外何も残らなくなつた時、ジャンヌは両手で顔を蔽うて、『あゝ、氣の毒なお母様。』と呟いた。

七

男爵が歸つた後で、パウが病氣になつた。ジャンヌは寐る眼も寐ずに、食物にも觸らずに、二十日許りと言ふもの恐れと苦しみとの中に過した。パウ

は直き癒つたが、いつ何時子供が死ぬか判らないと言ふ考から、もう一人子供が欲しいといふ漠然たる望みを抱くようになった。男爵は歸つてしまひ、母親は死んで了つたので、ジャンヌにはこの秘密な相談の相手とする人がなかつた。そこで到頭懺悔といふ名目で牧師に話した。子供が一人欲しい、と言ふと、牧師は面食つて、『それならば、何もさう難しい事ではありませんまい。』と言つた。そこで小間使の一條があつてから、良人と遠ざかつて居るといふ事を話した。牧師は氣の毒さうに横眼でジロリと見ながら、『判りました。貴女お一人被居るがお淋しいのぢや。貴女は未だお若い。お健康ぢや。御道理千萬ぢや。』と言つた。ジャンヌは眞赤になつて、涙を一杯溜めてさういふ意味ではないと、啜り泣きながら言つた。

ある夕方、ジュリアンは可笑しさうな微笑を口邊に浮べて、食事中ジャンヌを見てゐた。そして少し皮肉に、媚びるやうな態度を見せた。食後に二人が散歩した時、ジュリアンは妻の耳に囁いた。『吾々はまた友達にならうといふ譯だ

ね。』ジャンヌはそれに答へなかつた。けれどもジュリアンはもう前のやうに氣の軽い良人としてでなく、注意深い戀人のやうにしてジャンヌを取り扱つた。ジュリアンに取つて、往時の關係に復することは、不愉快なものでないまでも、確かに一つの義務であつた。ジャンヌも厭はしい苦しい勤めとして良人に随つた。ジャンヌは良人が以前のやうでない事が判つたから、何故さうでないかと訊ねた。そして『貴方も子供が欲しいとは思ひませんか。』と言つた。ジュリアンは喫驚して、『ナニ子供、お前はどうかしてゐるな。もう一人だけで澤山だ。ギヤア／＼泣くし、金が要る、手が要る。もう一人子供だつて？厭な事だ。折角だが御免蒙らうよ。』と答へた。ジャンヌは良人を接吻しながら、『ねえ、お願いですから、もう一度母にして下さいまし。』と言つた。ジュリアンは怒つて、『可い加減にしないか。もうそんな馬鹿な事は言はないで呉れ。』と言ひ放つた。

ジャンヌは子供が欲しいといふ思に驅られて、又牧師の所へ相談に行つた。

牧師は面白さうに一部始終を聞き終つた後で、『では、貴女が御妊娠なすつたといふ事を御良人に信じさせるのです。すると今度は眞實にさうなられますぞ。』と教へた。ジャンヌは髪根まで赤くなつて、もし良人が信じなかつたらと訊くと、『澤山の人に御妊娠と被仰るが可い。外の者が信ずれば、御良人もお信じになります。』と言つて聞かせた。ジャンヌは教はつた通り良人に言ふと、ジュリアンは喫驚したが、直ぐ、『そんな事があるものか、お前が妊娠するなんて。』と言つた。そこでジャンヌは大勢の人に吹聴した。ジュリアンは再度妻の部屋を訪れるやうになつた。そして牧師の豫言通り、ジャンヌはもう一度母となつた。けれ共、その後は良人に向つて厳しく閨の戸を閉ぢた。

其年の九月の末に、牧師ビュオは新しい法衣を着て新任の牧師トルビアを紹介せに城館へやつて来た。トルビアは凹んだ眼の縁の黒い、自分の意見通り行つて、世間のいふ事など構はないと言ふやうな物言をする、瘦せた小さな、莫迦に若い男だつた。ジャンヌは牧師と別れる事が悲しかった。新しい牧師

はそれから度々城館へ来た。ジャンヌは漸次この弱いやうな頑な牧師に感化せられた。けれどもこの新任の牧師は、村中の憎まれ者となつた。牧師は盜賊の番をするやうに、若い戀人の見張りを初めて、月夜には溝の縁、納屋の裏、小山の下、原の間などから密會してゐる者を掴み出した。『碌でなし奴、未だそれを止めないのか。』さう言つて、まるで野良犬にでもぶつけるやうに石を投げた。ジュリアンは牧師の事を、『あゝいふのが私の好きな坊様さ、あの人は中途半端つて奴が堪へられないんだよ。』と言つた。けれどもレ・ビュールへ歸つて来た男爵は、一眼見ると直ぐ嫌惡の情を催して、『檢察官見たいな奴だ。私は頗る危険な人間だと思ふね。』と言つた。一度かういふ事があつた。新任の牧師がジャンヌを訪れての歸途、子供等が犬のお産するのを見て、『又生れた。』と囁立てゝゐた。トルビア牧師は驚いて見てゐたが、やがて傘を取り直して、腕白共を追ひ散らした。そして犬を撲り初めた。犬は苦しげに鳴き立てた。その中に牧師の傘が折れた。今度は犬を踏みつけて、到頭蹴殺してしまつた。男爵は同

じやうに猛り立つて、牧師の咽を掴まへて、帽子の飛ぶ程張り撲つて、往來へ
 投げ出した。男爵は常々から牧師を敵としてゐた。そしていつも、『彼等と戦ふ
 のは、人間の権利で義務である。彼等は人間ではない。人生に就いて何事も解
 しては居ない。彼等のする事は自然に恃つてゐる。』と息捲くのだった。

男爵は牧師を嘲笑つてゐたが、牧師は城館の人を呪つて、次の日曜日には訪
 問しなかつた。そして度々ジャンヌに言ひ告げて聞かれなかつた、ジュリアン
 と伯爵夫人ギルベルトとの情事を仄めかした。ジュリアンは評判になるのが恐
 ろしいので黙つてゐたが、腹が立つたので終ひには大僧正の許へ手紙を送つた。
 そこでトルビア牧師は免職になると嚇されたので、漸く悪口を止めた。

五月初旬の風の吹く午後のこと、ジャンヌは書物を手にして爐傍に坐つてゐ
 た時、フィルヴィイル伯爵が狂人のやうになつて急いで來るのを見た。

『妻は此方へ參つて居りませぬか。』と呼吸を切らして訊いた。

『否、今日は未だ一遍もおいでになりません。』

ジャンヌが喫驚して答へると、伯爵はグツタリとして、それから何か恐ろし
 い事を言ひ出さうとしたが、直ぐジャンヌを見詰めて、『ですが、やはり貴女の
 御良人の事ですから……貴女も。』と言ふかと思へば、今度はイキナリ海の方へ
 駈け出した。ジャンヌは伯爵を止めようとして後を追ひ掛けながら、『あ、もう
 何もかも御存じだわ。どうなさるのだらう。あ、神様、萬望見つかりません
 やうに。』

伯爵はジャンヌの呼ぶのには耳もかさず、足に任せて突進した。ジャンヌは
 逆も追ひ付かれなれないと思ふと、伯爵の姿の見えなくなるまで見送つてゐたが、
 恐怖と心配に苦しんで家へ入つた。伯爵は崖ツ縁を右へ曲つた。海は酷く荒れ
 てゐた。風はひゅう／＼呻き立つて草の上を吹き荒した。大風のもたらす雨が
 伯爵の顔を打つて、頬や髯を濡らした。谷と伯爵の間には淋しい羊飼の小屋が
 建つてゐた。馬が二頭その柱に繋がれてゐる。伯爵はそれを見ると地を這つて
 行つた。毛皮の帽子と泥塗れの毛の獵服が、恐ろしい動物のやうに見えた。伯

爵は板の隙間から見られては一大事と思つて、小屋の下へ這ひ込んだ。馬は伯爵を見ると、前脚で地を搔き初めた。伯爵は小刀を出して馬を繋いである手綱を徐々切つた。そして新規に大風が吹いて来た時、二疋の馬は、傾いてゐる小屋の屋根にあたつて跳ね返つた。骸に背を打たれて、駛り去つた。伯爵は膝を突いて、小屋の中を隙視して居たが、やがて全身泥塗れになつて飛び上りさま、小屋の門を閉めると、柱を掴んで小屋を引き摺り出した。伯爵は小屋と、夫から何が起つたか判らずに、只絶望的の叫びを揚げて、戸を破つて出ようとする中の人々を引き摺つて、谷と垂直の傾斜の方へ行つた。末端まで来ると伯爵は手を放したので、小屋は谷底めがけて馳せ降つた。初めは緩く、それから勢ひこんでがらりと落ちて行つた。根こぎにされて山の頂上から投げ下された家のやうに、ごろ／＼轉げて、地面に落ちると、卵の殻のやうに潰れて了つた。

伯爵は小屋の落ちるのを見た時、狂人のやうに駈け初めた。方向も定めずに、數時間駈け通したが、夕方になつて邸へ歸つた。主人が歸ると召仕が乗手のな

い馬の歸つて来たことを話した。伯爵は後退りをして、『何か變事があつたに相違ない、探しに行け。』と取り亂した聲で言つた。そして自分も探しに出る風をして出て行つたが、人の眼に着かない所へ来ると藪に身を潜めて、夫人の運ばれる道筋に氣をつけてゐた。直きに車が一輛、奇妙な荷を積んで通つた。車は邸の門へ入つた。長い事待つてゐたが車は歸つて来ない。伯爵は妻が死にかけてゐるのだと思つた。そして自分が探し出されて、無理に妻の死ぬのを見せられるのが恐ろしいので、森の奥深く隠れて見たが、自分ほど妻の世話をしてやる者はないと思つて走り歸つた。入口で園丁に、『どうした。』と訊ねた。園丁は有りの儘に言はうとしない。で、『死んだか。』と怒鳴り付けるやうに訊くと、漸く『唯。』と答へた。伯爵は安堵して階段を登つた。同時に一方の馬車がレ・ビュールに着いた。ジャンヌは遠くからそれを見て直ぐ判つた。そして氣を喪つて地面に倒れた。再び氣のついた時には、父親が自分の頭を押へてゐた。

『お前、知つてゐるかい。』男爵は逡巡ひながら訊いた。

『え、お父様。』立たうとして躡いたが、再び後方へ倒れずには居られなかつた。

その夜、ジャンヌは死兒——女の子を分娩した。

八

皆から、もう所詮助かる見込みはないと思はれてゐたジャンヌは、漸々快い方に向つたが、三月の間は自分の部屋に閉ぢ籠つてゐた。病人の神経は悉皆害はれてゐたので、僅かな感動の爲めに、長い卒倒に陥つた。ジャンヌは一度も良人の事を訊かうとはしなかつた。他の人は皆不慮の出来事と解してゐた。ジャンヌは良人の恐い秘密も、あの日伯爵の來たことも、誰れにも言はなかつた。ジャンヌは良人の事を忘れて、只管わが子の事を思つた。そして二年経つて三年目の冬の初め、冬中ルウアンで送ることに極めたが、湿々した古家へ着くと直ぐ、パウルが肋膜炎になりさうな位酷い氣管支加答兒に罹つたので、母

親は狂氣のやうに心配した。そしてレ・ビユープル以外の空氣は子供に向かないものと思つて、病氣が快くなると、直様舊の所へ引き返した。それから靜かな變化のない歲月が続いた。ジャンヌと男爵とリゾン叔母さんと、子供と一緒に居て、子供が、あゝ言つたとか、かう言つたとか言つて、始終興じてゐた。ジャンヌは子供の事を、『パウレエ』と呼んだ。子供は口眞似をして『パウレエ』と言つて皆を笑はせた。で到頭、『パウレエ』と言はれるやうになつた。子供はグングン成育なつた。男爵が戯れに、『三人のお母様』と呼んだこの家の家族は、客間の壁にその月々の子供の身長を計つて、小刀で筋を附けた。そして是れを、『パウレエの梯子』と言つて、皆大騒ぎやつた。それから又子供が好きだと言ふので、マツサクルといふ犬の、今まで馬小屋の前に繋がれてゐたのが、引き出されて伴侶になつた。

パウルが十才になつても、ジャンヌは未だ赤子のやうに扱つてゐた。男爵がいつもより少し長く書物を読ませると、『疲れるまで本を読ませるのは可哀

想ですよ。』と言つた。そして絶えず子供の事で心配してゐた。十二才になると、叔母の勧めで日曜學校へ通はしたが、一月も絶つと、行儀が悪かつたので立たされたと言つて、咳が出た。ジャンヌは仰天して、それつきり學校へやらずに手許で仕込む事にした。ジャンヌはもうあの事あつて以來、牧師を恐れて教會へは行かなかつた。プウレエが十五になると、恐ろしく大きくなつて、客間の壁の一等上の筋は下から五尺以上にもなつた。けれども心はまだカラキシ足りない子供だつた。男爵は或る朝、子供を高等學校へやると言ひ出した。ジャンヌは紳士の百姓に育てようと言ひ張つたが、男爵は首を振つて、『もし子供が前に對して、僕は貴女の愛のお庇で無教育な者となりました。今更何もする氣になれません。然し僕だつて、初めからこんな退屈な面白くない生活を送る意ではなかつたんです。』とかう言つたらお前は何と返事が出来る。』と言つた。ジャンヌは頬に涙を垂しながら、子供の方へ振り返つて、

『ねえ、プウレエや、妾が餘りお前を可愛がつたからつて、お前妾に不足を

お言ひぢやなからうね。』

『否、お母様。』

『屹度、屹度ですか。』

『え、お母様。』

『お前は此處に居たいんだらうねえ。』

『え、お母様。』

男爵は傍からジャンヌを叱つて、漸くパウルをハヴルの高等學校へ送ることに定つた。十月の朝、三人は馬車でパウルを高等學校へ連れて行つた。ジャンヌは歸つて來ると、終日泣いてゐた。そして度々學校を訪れるので、遂には校長から學課の邪魔をしないやうにと、嚴しく手紙で言つて來た。男爵はジャンヌの學校へ行くことを差し止めた。そこで母親は、日曜日に息子の來るのを楽しみにして待つてゐた。そして來ると相變らず小さい子供のやうに世話を焼いた。ところが或る土曜日の朝手紙が來て、それには明日の日曜は友達の會へ招

かれてゐるから、家へは歸らないと書いてあつた。で、その日曜終日中、ジャンヌは不幸な事になりはしまいかと心配ばかりしてゐた。そして木曜日には、堪え切れなくなつて學校へ出掛けた。ジャンヌは一目で息子が大人らしくなつてゐるのに氣が付いた。パウルは『お母様、僕等は遠足をやらうといふ所なんです。がね、今日来て下すつて丁度可い。この次ぎの日曜も家へは行きませんか。』と、何でもない事のやうに言つた。『まあ、プウレエ。お前どうしたと言ふんです。どうしたのだから、お母様にさう被仰い』と喚いた。子供は只笑つて、母に接吻した後で、『何故です、お母様。何でもありませんよ。唯友達と一緒に樂しまうといふだけでさあね。僕位の年齢になれば、誰れしもする事ですもの。』と言つた。母は何とも言はなかつたが、子供はもう昔のプウレエ、自分の可愛いプウレエではなくなつた。大人になつた。最早自分の所有ではない、と言ふことに心づいた。ジャンヌは僅一日の中に、パウルが全く變つて了つたやうに思はれた。それから時々歸つて來ても、パウルは出来るだけ早く歸らうとする様子

が見えた。或る朝、汚い着物を着た、獨逸の音で物をいふ老人が奥様にお眼に掛かりたいと言つて來た。通されると、堅苦しい挨拶を何遍もしてから、薄汚い手帖を出して、脂染んだ紙片を差し出した。ジャンヌは、それを二度讀んで見たが判らなかつた。そこで、『一體、どういふ譯です。』と訊いた。男はパウルに金を借したと説明したので、ジャンヌは慄へながら、『何故家へ取りに來なかつたのだらう。』と言つた。金貸の猶太人は、それが賭博の借金で、もし拂へなければ名譽に觸るやうになつて居たかも知れないと話した。ジャンヌは男爵を呼ばうにも力が抜けて了つた。そこで、『まことに相済みませんが、其鈴を押して下さいな。』と頼んだ。猶太人は薄氣味悪さうに、『もしお差支ならば、重ねて上りました。』と言つた。男爵は入つて來ると、直ぐ話が解つたので、千五百圓の手形に對して千圓出して、『二度と來ては可かんぞ。』と言つた。男は禮を述べて歸つて行つた。ジャンヌと男爵は即刻學校へ行つたが、パウルは其處に居なかつた。校長

はジャンヌから来た四通の手紙を見せた。それには醫者の診断書が附いてゐて、生徒の病氣の様子が書いてあつた。無論それは偽手紙だつた。ジャンヌと男爵は顔を見合はせて驚いた。校長は氣の毒がつて、パウルの搜索する爲めに、二人を警察へ紹介した。二人はその晩宿屋へ泊つた。翌朝、パウルはある道樂女の所で見付けられた。二人はパウルを家へ連れて歸る途次、一言も口を開かなかつた。ジャンヌは手巾で顔を隠して泣いてゐたが、パウルは知らん顔をして馬車の窓から外を眺めてゐた。

この三日の間にしたパウルの借金は、一萬五千圓もあつた。ブウレエは詰問も叱責もされず、只乗つて逃げる事を恐れて、乗馬を禁じられた外、何事でも許されてゐた。パウルは氣短になつて、癩癩を起しては投げやりの生活をすゝるやうになつた。一體子供はどうなるのだらう、とジャンヌはそれを訝しみ初めた。或る夕方、パウルは船で出たきり、到頭歸つて來なかつた。警察の搜索も効がなかつた。以前パウルを匿つた女の家も、家財を賣拂つて行方を暗まし

てゐた。英國へ行く金が出来たと、この狂氣のやうに惚れ合つてゐる仲らしい女からの手紙が二通、パウルの部屋で見付けられた。ジャンヌの半白の髪は、全く白くなつた。直きに倫敦から手紙が來た。それには女の事と一萬五千圓の要る事が書いてあつた。三人は涙を流して手紙を見た。が、ジャンヌはやがてこの息子を盗んだ女に對して、恐ろしい憎しみの念が湧き上つた。そして、こんな女と一緒に所有にして置くよりは、寧ろ失した方が増した、といふ恐ろしい考へが浮かんだ。ジャンヌの悦びも楽しみも悉皆消えて失つた。

一萬五千圓の金を送つてから、五箇月といふものパウルの便りがなかつた。五箇月目の末に、パウルの財産相續に關して、巴里から辯護士が來た。ジャンヌも男爵も何一つ諍はずに、すべての申し出を容れて、財産全部を譲り渡した。で、パウルは十二萬圓の持主になつた。それから六箇月の間、僅四本の短かい手紙が來た許りだつた。その後、『母上様、私は破産しました。』といふ自暴自棄な手紙が來た。パウルは八萬五千圓の借財をしたといふので、男爵は所有地を

抵當に、金を借りてパウルに送つた。息子は感謝の手紙を三通まで寄越して、直ぐにも来さうな事を言つて来た、が来なかつた。そして又一箇年が経つた。ジャンヌと男爵が、パウルを連れ歸らうと思つて、巴里へ出掛けようとした時、息子は又倫敦にゐて、『パウル・ド・ラマアル會社』といふ汽船會社を建てようとしてゐると書いた短い手紙が来た。けれども三月の後に會社は破産して、支配人は帳簿を胡摩化した廉で訴へられた。これを聞いた時、ジャンヌは何時間にも亘るやうなヒステリーの發作を起した。男爵はハヴルへ行つて、方々聽き歩いたり、辯護士に會つたりして、ド・ラマアル會社が二十三萬五千圓の損をしたといふ事を知つた。そこで又もや、レ・ビュールと附屬してゐる二つの畑地で、巨額の金子を借り込んだ。或る夕方、法律事務所で最終の手續きをしてゐる時、男爵は卒中で倒れた。早速馬で使が出されたが、ジャンヌの來ない先に男爵は死んだ。遺骸はレ・ビュールへ送られたが、トルビア牧師は、再び教會へ出るやうになつたジャンヌとリゾン叔母様が頼むのも聞き入れず、儀式を行つて埋

葬することを承知しないので、葬儀は何等の式もなく、夜分行はれた。ジャンヌは悉皆氣を落して、詰らない事でも呑み込めないやうになつて了つた。英國に隠れてゐるパウルは、祖父の死を聞いて、疾くに何ふ筈であるが、今報知を聞いた許りだからといふ手紙を寄越した。そして、『お母様、今貴女が私の難儀をお助け下さいましたから、私は即刻佛蘭西へ歸ります。そして直ぐお目に掛かります。』と書いてあつた。

冬も終る頃、六十八になつたリゾン叔母が、重い氣管支加答兒に罹つたが、やがて肺炎に變つて、靜かに息が絶えた。ジャンヌは墓場まで跟いて行つて、棺に土の被せられるのをも見た。そして自分もひと思ひに死んで了つて、考へるのも苦しむのも止しにし度いと思ひながら地に倒れた。寢臺の上に寝かされると、五晩も續けた看病疲れて熟睡した。眼を覺したのは夜中だつたが、眩掛椅子に一人の女が眠りこけてゐた。ジャンヌは誰れだか判らないので、身を乗り出して見ると、前に見た事のあるやうな顔だが、扱何時何處で會つたか思ひ

出せなかつた。四十四五の頑丈な百姓女で、赧顔の、髪は半白になりかけてゐる。ジャンヌは寢臺を降りて、爪立つて女に近寄つた。そして墓地で自分が倒れた時抱き上げて、それからズツト世話をして呉れた女だといふ事だけ判つたが、猶その外にもこの女を知つてゐる筈だと思つた。女は眼を覺ますと、『まあどうしてこんな所へ。さあ〜寢床へお歸んなさい。夜中に起きると鹽梅が悪くなりませよ。』と言つた。『お前さん、誰れ。』とジャンヌが訊いた。百姓女は黙つてジャンヌを抱いて、子供を寢かすやうに寢床へ入れると、のし掛つて頬や顔や眼を接吻し初めた。眼には涙が流れ出た。そして啜り泣きながら、

『お可哀想な奥様、ジャンヌ様、お嬢様、妾が判りませんか。』

『あゝ、ロザリイだね、小問使の。』

ジャンヌは女を接吻した。二人は抱き合つて、互ひの涙と啜り泣きを混じた。ロザリイは亭主が働き者で、金を大分拵へたが肺病で死んだ事や、あの子供が立派な若い男になつて、半年ばかり前に嫁を貰つたので、かうやつて出て來ら

れるのだと話した。そしてジャンヌの一人法師になつたのを見て、世話をしに來たと言つた。そして金の整理まで付けると言ひ出すと、ジャンヌが微笑したので、『お笑ひになるなんて。奥様、金がなければ人間何の價値もありません。』と腹を立て、言つた。ジャンヌは召使の兩手を執つて、

『ねえ、ロザリイや、妾は一度も幸福ぢやなかつた。妾の一生は酷い運命の爲めに、滅茶々にされて了つたのだよ。』

と言ふと、ロザリイは首を振つて、

『そんな事を被仰るもんでほございませぬ。奥様。貴女は不仕合な結婚をなさいました。それ丈でございませぬ。自分の將來の良人の事を、一寸も知らな

いで結婚するもんぢやございませぬねえ。』
一週間も経たないうちに、ロザリイは悉皆城館の事を指揮するやうになつた。そして懇意な辯護士の所へ行つて聽いて來た、この家の収入の事を持ち出して、ジャンヌに話した。『貴女はそれで宜しいでせうが、パウル様はどうなさいませぬ。』

あの方に何にも残さないお意ですか。今に結婚なされば、お子様の御養育費が要ります。妾の申すことをよくお聞きなさいませ。貴女はレ・ビュールをお賣りにならなければ——。』ジャンヌは驚いて寢臺の上に起き上つた。けれどもパウルのふしだらを知ると、ロザリイは今後後始末をしては可けないと教へた。そして到頭、レ・ビュールを賣らせるやうに口説き落した。愈々引き移るといふ日、ロザリイの息子の若いドニ・ルコオが馬車を持つて來た。八時頃、風の爲めに斜に吹きつけられる小雨が降つて來た。室々に訣別を告げたジャンヌは、帽子と肩掛を着けて居ると、塊が咽へ込み上げて來た。『ロザリイや、覺えてゐるだろ、ルウアンから此處へ來た日も、やつぱり雨が降つてたねえ。』と囁くと、心臓を押へて後方に倒れた。ロザリイ母子は、ジャンヌを馬車の上へ連れて行つて、足を肩掛で包んだり、傘をさし掛けたりした。息子は馬車の外へ片足出して腰を掛けた。曲り角に誰れかが往つたり來たりしてゐた。それはトルビア牧師で、この出立を見送りに來たのだ。黒い靴下と泥だらけの長靴の見えるま

で、法衣を汚すまいとして片手でたくし上げてゐた。ロザリイは、『畜生奴、鞭で引撲いておやりよ。』と息子に喚いたが、息子はさうしなかつた。けれども馬を急がせて牧師の前まで來ると、馬車の輪を深い泥土へ落したので、牧師の身體は跳が上つて泥だらけになつた。ロザリイは顔の造作を歪めて笑つた。そしてクルリと振り返つて、大きな手巾で、跳かつた泥を拭いて立つてる牧師に、握り拳を振り廻して見せた。

九

ジャンヌは、新しい家に馴染む事が出来なかつた。そして一階の一室を飾つて、『プウレエの部屋』と、内心で定めてゐた。眼の利かなくなつた老犬のマツサクルも不安だつた。『初めての晩は、臺所の料理臺の下へ潜り込んで、誰れが何と言つても出て來なかつた、一晩中憐れな聲で吠え立てた。それから毎晩新しい家に居付かうとするやうに、唸つたり引掻いたりした。そして或る朝、

犬が死んでゐた時、家の人々は吻とした。ジャンヌはレ・ピエールや父母や叔母の夢を見た。そして夢の覺めた時、定つて泣き出すのであつた。パウルの事は片時も忘れなかつた。そこで今の自分の淋しい境涯を訴へて、直ぐにも歸つて来て呉れるやうに手紙を書いた。そして受け取つた返辭には、一文なしだから送金して下さいと歸る。彼女との結婚を許して呉れ、と言ふのだつた。ロザリイに話をする時、『そんな事を御承知なすつたんぢやありませんまいね。そんな女を連れて被來る事は出来ませんよ。』と、召使は驚いて言つた。そこで到頭ジャンヌは、息子に自分とその女と何方が大切か撰ばせる爲めに、仕立卸しの一張羅を纏つて、巴里へ向けて出立する事にした。そして豫め息子へ宛てて手紙を出して置いた。ジャンヌもロザリイも軌道を見ながら、汽車がどんな物かと待つてゐた。ジャンヌはこの黒い機械に乗り込んで、自分の走つて行く速力に魂を潰して、自分が人生の新らしい現象に入り込んでゐるのだと思つた。巴里に着いたのは夕方だつた。

翌朝疾く起きて、息子の住むサウヴァージュ町まで、儉約をして歩いて行つた。風は酷いけれど、よく晴れた日だつた。ジャンヌは散々歩いた上に道に迷つて、辛との事で探し當てたが、尋ねる番地の所に來た時は、一足も歩けないで、そこへ立ち止つて了つた。パウレエが其處にゐる、其の家の中に居ると思ふと、手足が慄へた。で門番の許へ行つて、若干金か擱ませながら、
『パウル・ド・ラマルさんにね、お母様のお友達のお友達の老女が會ひに來たと言つて下さい。』

『あの人はもう此處にゐません。』と門番が答へた。ジャンヌは愕然として、
『今は、何處に、何處にゐます。』と息忙した。
『知りませんな。』
ジャンヌは眼が廻るやうに覺えて、口を訊くのて手間が取れたが、漸く心を落着けながら訊ねた。
『何時頃から居なくなつたんです。』

門番は洗ひざらひ言ひ立てようとして、『二週間ほど前ですよ。夕方、散歩に出たきり歸つて来ないんです。そこら中に借がありますから、居所を知らさないのも無理はありませんや。』

正面に鐵砲を打たれたやうに、焔の舌がジャンヌの眼前で躍つた。

『出て行く時に、何とも言つてかないのですか。』

『さうですとも。借金が拂へなくつて、夜逃げをしたんですからねえ。』

『それでも、手紙を取りに来なければならぬでせうがね。』

『手紙なんて来やしませんよ。一年に十本来るか来ないです。尤も出て行く二日ばかり前に、一通来たやうでした。』

それはジャンヌが出したのに相違ない。ジャンヌは改めて金を握らせながら、事情を打ち明けて、自分の宿屋を教へて、何か聞き込んだ事があつたら、知らせて貰ふやうにした。それからジャンヌは町中を急いで歩いた。飲食店を覗いた。二軒で何軒か通り越した。最後に麵麩屋で、弦月形の小さな卷麩麩を一つ買った。二日ばかり前に、一通来たやうでした。

て、歩きながら喰べた。咽が堪らなく渴いたけれど、どうしたら飲料が手に入るか判らないので我慢した。翌日は警察へ行つて捜索方を頼んだら、確かな返事は出来ないが、兎に角氣を付けてやらうと云はれて、其處を出た。それから、萬一パウルに會ひはしまいかと思つて、町中を歩いた。夕方、宿に歸ると、留守に男が訪ねて来て、明日又来ると言ひ置いて行つたと話された。ジャンヌはその夜マンジリともしなかつた。大方パウルだらう。宿の者のいふ所では、人相が合はないけれど、どうもパウルらしい。朝の九時頃、コツ／＼と戸を訪れた者があつた時、屹度息子だと思ひながら、『お入んなさい。』と言つた。

けれども、入つて来たのは知らない人だつた。この男はパウルに九十圓の貸金があるので、其の請求に来たのだ。それを聞きながら、泣き出しさうになつて来たジャンヌは、指で眼頭に溜る涙を密と拭いて、早速金を拂つてやつた。その日は一日外へ出ずにゐた。翌朝、いろ／＼の借金取が押しかけて来たので、ジャンヌは持つて来た金を悉皆拂いた。そして此事をロザリイに知らせてやつ

た。ロザリイから来た手紙には二百圓封入してあつた。『奥様。早くお歸り下さい。最早お送金する事が出来ませぬ。パウルの事は聞き込み次第、妾が代つてお連れ歸り申しませう。』

ジャンヌは寒さの烈しい雪の朝、家へ歸ることにした。

十

その後のジャンヌは、戸外へも出ずにぢつとして暮してゐた。時々『可愛いブウレエ』などと子供に話し掛けてるやうに口走つた。ジャンヌはこの字を指で書いたり、空に見たりするのだつた。ジャンヌは、もう少しも意思といふものを有たなかつたので、『ロザリイ、お前の可いやうにしてお呉れよ。』と言ひ言ひした。

『妾ぐらゐ不仕合な者は、又とあらうとは思はれない。』と何時も言つてゐた。ロザリイはこれを聞くと、

『けれども若し貴女が、喰べる爲めに働かなければならぬやうでしたらどうです。毎朝遅くも六時に起きて、苦しい日雇取の仕事に出なければならぬやうでしたら。幸福の人は大抵してゐる事なんでございますよ。その人達はね、年が寄つて動けなくなれば、貧乏に負けて死んで了ふのです。』

『けれど、子供は妾を捨てたぢやないか。妾は一人法師だよ。』

ロザリイは少し腹を立てて、子供といふものは早晩、親の手元を離れて行くものだと言つて、終ひには、『もし若様がお残りになつたとしたら、何うなさいます。』と容赦なく鬼をつけた。それを聞くと、ジャンヌはもう何も言へなかつた。

ジャンヌはレ・ピューブルから持つて来た古道具を見て、老女の弱々しい、憐れな涙を流した。夏になつて著しく落着かなくなつて、日に二十度も家を出たり入つたりした。そして一寸の間、自分の年齢も、老先きの短い事も忘れて、いろ／＼の空想をしたり、十六歳の昔考へたやうな、幸福な未來の計劃を立て

て見たりした。けれども、偶と今の情ない現実に思ひ當ると、重荷が被さつて来たやうに、『あゝ、馬鹿なお婆さんだね。』と呟くのであつた。

或る日、ロザリイは用事があるので、レ・ビユーブルへ行かなければならなかつた。そこでジャンヌも一緒に連れて行かれた。ロザリイが用に出た後で、今持主が居ないから、何なら中を御覽なさいと言つて、小作人が鍵を貸して呉れたので、ジャンヌは悦んで城館へ入つた。先づ一番に自分の部屋へ行き、それから墓の中にあるやうな、廣い、荒れた家の中を、音も立てずに歩き廻つた。ジャンヌの一生は其處に埋れてゐたのだ。

古い間毎の幽かな薫のやうな過去の匂を吸ひながら、客間の肱掛椅子の上で父母の姿を見た。確かに見たやうに思つた。恐ろしさに蹣跚いて壁板に寄りかかつた。氣が狂ふのではないかと思つて、逃げ出さうとした途端に、自分の寄りかかつてゐる壁板に氣がついた。そして、『ブウレエの梯子』が眼に入つた。そこには不揃ひな筋と、口と子供の年と、身長を小刀で印した數字が掛かれて

ゐた。男爵が大きく描いたのもある。ジャンヌの描いたのもある。リゾン叔母の描いたのは、少し慄へてゐた。『ジャンヌ、六箇月に一寸も伸びたぜ。』と男爵が言ふと、綺麗な頭髮の男の子が、丈を測つて貰ふので、小さい額を壁に當ててゐる容子が見えた。ジャンヌは壁板に接吻した。

今の住居へ歸つて來ると、ジャンヌはパウルから手紙が來てゐるのを見つけた。

『親愛なる母上、小生が手紙を上げなかつたのは、用事もないのに、母上を巴里くんだり迄お呼びし度くなかつたからです。それに當方から參上しようと思つてゐるのでした。今小生は非常な難儀に出會つて居ります。妻は三日前に女兒を生んで、死にかゝつて居ります。私は一文なしです。子供をどうしたら可いでせうか。門番が哺乳器で育てて呉れますが、そんな事では覺束ないと思ひます。母上がお引き取り下さる譯には行きませんか。里子にやらうにもその金がないのです。私は途方に呉れて居ります。この手紙着次第何卒御返事下さい。』

貴女の愛する子供、パウロ。』

ジャンヌは読み終ると、ロザリイを呼ぶ勢ひもなく、椅子に沈んだ。

『妾行つて、赤さんを連れて來ませうか。見殺しには出來ませんから。』

とロザリイが言つた。

『お前行つてお呉れな。』

『奥様、帽子をお被りなさいまし。さあ、一緒に辯護士の所へ行きます。』

女が死に掛けてゐるとすれば、赤さんの爲めに、パウロ様はその女と結婚なさ
らなければなりません。』

その晩ロザリイは巴里へ立つた。そして夜汽車で歸つて來るといふ三日目の
夕方、ジャンヌは馬車に揺られて停車場まで出迎ひに行つた。ジャンヌは通り
過ぎる客車の窓を、熱心に覗き込んだ。戸が開いて大勢の人が降りた。一番後
からロザリイがリンネルの束見たいなものを抱へて出て來た。

『唯今、奥様。いろく厄介な事もありましたが、辛と片附けて來ました。』

『どうだつたい』と呼吸苦しうにジャンヌが聞いた。

『あの女は昨晚歿りました。お二人は結婚しましてね。そら、赤さんがね。

と言ひながら、ロザリイは布に包まつてゐる赤子を渡した。ジャンヌは器械
的にそれを受け取つて、二人は馬車に乗つた。

『パウロ様は、お葬式が済めば直き歸つて被來いますよ。多分明日のこの汽
車でお出でせう。』

『パウロ』と、ジャンヌは呟いたが、それつきり黙つて了つた。

黄金色の菜の花や、血のやうに眞紅な罌粟の花が、此處其處に咲き亂れてゐ
る野に、輝めく光を浴びせながら、太陽は地平線に沈みかけてゐた。静かな田
舎の上に、限りもなき平和が落ちて來た。

ジャンヌは着物の上から泌徹る温みに氣がついた。膝の上に睡つてゐる小さ
いものゝ熱が、ジャンヌを感じさせた。吾が子の娘が見られると思つて、まだ
見なかつた赤子の覆ひを取り除けた。日光が顔にあたると、赤子は碧い眼を開

いて唇を動かした。ジャンヌは確りと抱き締めて、熱心に接吻した。
『まあ、奥様。お止しなさいまし。赤ちやんが泣き出しますよ。』
とロザリイが言つた。そして自分の考へに返事をするやうに、かう附け足した。
『世の中と言ふものは、人の思ふほど楽しいものでもなければ、悲しいものでもないんですねえ。』

女の一生 終

大正三年五月十八日發行

印刷

(定價金拾錢)
(郵税金別)

ア カ キ 叢書
第七十篇
女の一生

著者
發行者
印刷者
印刷所

村上 静人

赤城 正藏

東京市麹町區三番町五〇

中田 福三郎

東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

秀英舎第一工場

東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌元
賣捌所

東京市麹町區三番町五〇
電話番町二二八〇番
振替口座東京一〇四三二

赤城正藏

全國各書林

274
864



アカギ叢書

毎月十篇 一定價金拾錢
内外刊行 一郵稅各貳錢



- 一歐洲 村上靜人編 **人形の家** 一名
- 二哲學 中島文學士著 **プラグマチズム**
- 三歐洲 日野月文學士著 **ダヌンチオの女性**
- 四社會 葛西文學士編 **群衆心理**
- 五歐洲 ドストイエフスキイ **痴人**
- 六歐洲 村上靜人編 **ウエデと其著作**

- 七哲學 三浦文學士編 **ベルグソンの哲學**
- 八歐洲 オスカアウワイルド **サロメ**
- 九哲學 中島文學士著 **オイケンンの哲學**
- 十博物 寺尾理學士編 **ダーウの進化論**
- 十一日本 龍居文學士著 **文化江戸の世態**
- 十二歐洲 フライタツハ原作 **喜劇新聞記者**



特色

- (一) 科學文藝より粹を抜き英を取り紳士の標準智識たるを期す
- (二) 廉價、簡明、平易に解説して天下に讀み難きもの無からしむ
- (三) 名著の紹介は簡にしてその精髓を失はず



終

